

商務、翻訳、中国美術と世界文学

——中国と西洋の文化交流を推進した呉衡之の研究——

洪 再 新

後藤 亮子 訳

はじめに

- 一 ビジネス英語教育の先駆者
 - 二 中国「古画出洋」の推進者
 - 三 同時代女性画家の国際エージェント
 - 四 「世界文学」の翻訳紹介者
 - 五 体育・旅行活動の提唱者
- おわりに

はじめに

ある人物の名前が歴史に残るかどうかはその業績が関わった歴史的文脈（コンテキスト）と切り離せない関係にある。中国美術の国際市場の形成に伴い、呉衡之（一八七一～？、挿図1）という名前が清末民初の上海という国際都市において、そして近代の世界文学、世界芸術に関連して、あちらこちらで出現する。中国と外国の文学芸術交流史の研究者にとって、呉衡之は謎に満ちた研究対象なのである。呉衡之は広東省香山県（中山県）出身、名は権⁽²⁾、別名秉鈞⁽³⁾。号は香山老衲、晩年は退翁⁽⁴⁾、英文名は Heng-Chi Wolfe とす

う。呉衡之が関わった活動は多様性に富み、商業から翻訳、法律、教育、芸術、文学、不動産、旅行業まで多岐にわたる。本稿はそれらについて歴史的な探索を行うが、彼個人の人物像にとどまらず、彼が遭遇した種々様々な人々、特に彼が翻訳を通じて花を持たせた中国内外の様々な関係者についても考察を進める。「クロスコンテキスト」的アプローチ^(訳註1)により、中国と西洋

世界の文学と芸術各方面の交流について、マクロなコンテキストの中でその深層理解を進めることを目指すものである。具体的には、広東香山出身の呉衡之が、広東省、上海、更に国際的な舞台でどのように活躍したかを追う。それによって彼が「世界芸術」「世界文学」推進のために大きな貢献をなしたことが明らかになるだろう。

一 ビジネス英語教育の先駆者

近代翻訳史を論じる際、言語と文学が焦点となるのが常であり、ビジネス英語等の実用面に考察が及ぶことは稀である。十九世紀末から二十世紀初頭の上海で活動した広東出身の呉衡之は、以下に述べるように、困難な道を切り開きながらも忘れられてしまったビジネス英語教育の開拓者であった。彼は上海に出てきた最初の頃、ドイツ人弁護士F・フォルベルク (F. Vorwerk) とF・フォークツ (F. Vogts) の上海事務所で通訳をしていたことがある。⁽⁵⁾ 呉は広東籍の買弁 (現地代理人) であった金広生と共同してビジネス英語を教える私塾を開いた。教学制度の設計から人材の育成までその業績は著しく、名声は大いに響いた。一九二〇年までに『申報』『時報』『神州日報』に掲載された呉の活動についての記事はビジネス英語教育方面に集中しており、上海におけるビジネス英語教育の創始過程を示すものである。

一八九八年二月十日以降、「惜余英文学塾、生徒募集の広告」が『申報』に度々掲載された。これらの広告から同塾開設の信念を知ることができる。「本塾は後馬路章東明の左側に位置す。校舍拡充により募集人数増加。同路西端たる乾記弄に移転につき、西洋語学を志す者は随時来たりて学ぶべし。本塾授業は六班に分かれ、毎日二部制、昼の部は朝九時より四時まで、夜の部は七時より十時まで行う。授業内容は読本・史記・尺牘・地誌・算術の他、

作文、語句、論□、翻訳の各課を特に重点的に行う。ゆえにこれに専念するならば、学びを欲する者はその文や理法の主要文献を知りて、各書の言わんとするところを会得すべし、これ効果觀面の捷徑たらん。或いは急ぎ商務につき西洋語を学ばんとする者には、いかなる言辞についても均しく指導教授すべし。詳細は来たりて面談を請う。以上お知らせ申し上げる。広東呉衡之、金広生 拜。」⁽⁷⁾ 注意すべきは、ここで呉衡之とその仲間は、商科に対して好意的ではない中国社会の保守的な見方に対してもう一つの選択肢を示し、英語を専攻しようとする学生が迷わぬよう援助しようとしていることである。

一流のビジネス英語の人材を育成することこそが呉衡之の信念であった。実際一八九九年、呉培初が「十二歳で河南路天津路の章東明酒店の上階の塾で呉衡之に英語を学び」後にアメリカのシティバンクの買弁として名を成した。⁽⁸⁾ 一九〇二年に、王雲五 (一八八八―一九七九、後の商務印書館の総経理) が惜余英文学塾で学んだことは、後年、王が世界一流の出版者になる伏線となった。王は少年期の英語学習を振り返って言う。「私が入学した夜間学校の校長で唯一の教師でもあった呉先生も、自分と同じ香山県の人だった。(先生は私より年輩で後に私の親戚となられた。また私の部下になられたこともある。) 先生は昼間イギリスの大きな法律事務所に通訳を務め、夜になるとこの学校で教えているとのことだった。学校はイギリス租界の南京路あたりの酒楼の上階にあり、三部屋をぶち抜いて一つに繋げ、一度に二百人の学生が入れるほどの大教室にしていた。実際、学生はほぼこの教室を埋め尽くしていた。これらの学生は、レベルで言えばアルファベットを学ぶ初学者から五六冊の本を読んだ者まで、年齢でも十三、四歳の子供から四、五十代の中老年まで、ありとあらゆる者がいた。そういう多種多様でレベルも異なる

る人々がただ一つの教室の中に詰め込まれていたのだ。学生は学校に来ると、ずらりと並べられた長机と長椅子の好きなどころに座ったが、黒板前の一列だけは必ず空けておかなければならなかった。そこは先生の授業を受ける学生たちが順番に座る場所だったからだ。授業の順番については、だいたいの初級者が先で、習熟度の高い者は最後だった。授業の順番がまだ回ってこない学生は自分が選んだ座席で授業の予習をした。授業が終わればすぐ帰る者もいたし、学校に残って自習する者もいたけれども、いずれにせよ最初に座っていた座席は片付け、自習を続ける場合も他の空席を探すルールだった。⁽⁹⁾」

学校運営は実に粗末なものであったが、惜余英文学塾が育成した人材は高い評価を得ることになった。そうでなければ王雲五がこの恩師を覚えていたはずがない。だが呉衡之がどのように「学びを欲する者はその文や理法の主要文献を知りて、各書の言わんとするところを会得すべし、これ効果観面の捷徑」を実現したかについてはまだ説明が必要である。我々は『胡適自伝』により呉衡之の教育方法の影響を知ることができる。胡適（一八九一〜一九六二）の思い出によれば「私は二年間中国公学に通い、姚康侯と王雲五の両先生に大きな影響を受けた。お二人とも文法の分析によく注意を払ったので、私は当時あまり英語を話せなかつたけれども、英文の構文分析が好きになり、特に好んで中国語の文法と比較していた。⁽¹⁰⁾」この師承関係が伏線となつて、二十年后に王雲五は胡適の推薦により商務印書館の編訳所に入り、王雲五がまた呉衡之を同編訳所に加入させることになったのである。

惜余英文学塾は日増しに業績を上げ、一九〇六年秋には天津路から北京路清遠里に移転した。民国元年（一九一二）、同塾は安徽人に譲渡されたが、呉衡之は引き続き彼らと提携し、⁽¹¹⁾同塾は漢英務商学校と改められ（その後更

に上海務商中学に改名）、規模も目を見張るばかりになった。呉衡之が同校の広告で示した見方は「何事も皆下品で、ただ読書だけが高尚」とする儒教思想に真つ向から立ち向かうものであった。

昔日の中国の学校は専ら政治教育に重きを置き、人材育成は一律皆官吏を目指すものなり。その他の商業は甚だ重んじられず、それゆえ商業の退廃を招き財政も困窮に至りしが、その理由を考うるに、実に不完全なる商学教育の至らしめたものなり、それを思えば痛惜の念に堪えぬ。今まさに民国が成立し社会を更新せんとするにあたり、財政問題は特に火急に当たるべきものなり。しかし豊かなる財政は全てこれ商業振興にかかり、商業界の偉人輩出はひとえに教育育成による。まさにこれによりて欧米は富と力を成すにあり、我々はこれを戒めとせねばならぬ。上海は中国の一大通商港といえども商業学校はなお乏しく、一二の例があるにせよ小さな専門を売りにする個人学校規模に過ぎぬ。それゆえ本校の設立は、もつて商学全般の人材を育成し、商業振興と国富増強を旨とする。授業に用いる書籍については専ら別発印書館^(訳註2)の著述を用いる。皆これ本源を究め本質を説かんとするものなり。商界の時勢の変化や商戦の勝敗の理由については商業沿革史を講義し、財を生み貯め生かす方策については理財篇を教え、各地の生産力や収支の多寡については商業地誌学を授く。交易貿易を行う規則については商人の法学を授け、国内外の商業契約には文書や手紙の書き方・簿記・算術・省略記号の書き方・文章の整え方等の技術をもつて、学生をしてその奥義を究め広く学ぶことを得んとす。⁽¹²⁾

呉衡之は務商中学校長の任にあたり、「商務の専門知識を重視し、中英両語と商務に関わる各種職能に通じる」四年制の学科を定めることで「中国・西洋の学識を授け、商業人材を養成する」という教育理念を明らかにした。「我が国の貧困病苦を思うに、実利主義を重視せねばこの頹廢を挽回するとはできぬ。それゆえ切なる思いで商学を振興し、専門人材を育成し、もつて世の需要に応えんとす。ただ規模が大ならざれば成果も宏大ならず、意を決して名を務商中学と改め、校舎を拡張し、教師を増員し学費を軽減して、かたじけなくも学生を招集する次第なり。当面は学力により甲乙丙丁の四班に分け、予備班も設けて広く人材育成にあたる。現在教育部の認可申請中、八月二十八日開学予定。入学希望者は八月二十一日までに応募されたし。」⁽¹³⁾

惜余英文学塾から務商中学への学制の変化は商学の突出に表れている。「商学の全般に通じる人材を育成し、商を興して国を富ます」ため、「後期二年間は全て英語で授業を行う」とし、近代中国の商業教育史上、画期的な一歩を記した。⁽¹⁴⁾ 学校の理事名簿は「陳英士、王二亭、庄得之、藍天蔚、周金箴、虞洽卿、陳潤夫、潘蘭史、鍾衡臧、許際唐、李懷霜、王雲五、黃樸存（賓虹）、胡都文」⁽¹⁵⁾。潘蘭史（一八五八～一九三四）、李懷霜（一八七四～一九五〇）、王雲五らは広東籍の文化エリートで、安徽出身の黃賓虹（一八六五～一九五五）とは業務上関わりがあった。⁽¹⁶⁾ それ以外の人物については、例えば陳英士（一八七八～一九一六）は上海軍都督、藍天蔚（一八七八～一九二二）は関外軍政府大都督であり、⁽¹⁷⁾ このような人材が呉衡之の「配下」に収まった経緯については今後の研究を待ちたい。呉の人脈が商業に重きを置いていたことは、上海商会の首領虞洽卿（一八六七～一九四五）、王二亭（一八六七～一九三八）、陳潤夫（一八四一～一九一九）、庄得之⁽¹⁸⁾、周金箴（一八四七～一九二二）、鍾衡臧（一八七五～一九二五）らの顔ぶれを見れば自ずと明らかである。

このような文化的重商主義^(註3)は一九一四年九月二日の務商中学の始業式において色濃く現れている。翌日の『時報』『神州日報』に「務商中学秋期始業式」の記事がある。「閩北の務商中学は昨日朝十時に始業式を挙行した。新入生在校生百数十人が参列、また国内や当地の高等小学校を卒業し同校で修業する者も三十人の多きを数えた。最初に呉衡之校長が開学の趣旨を宣言し、堅実に忍耐強く勉強するよう学生諸君を激励。中国文化と西洋文化を共に尊重し、一方に偏らぬようにと訓示した。続いて来賓の上海道尹署実業課長兼財政課長の卓璧如氏が演説。商業は目下の重要任務であり、商業界に役立つ人材となることを望むと述べた。続いて理事の黃樸存（賓虹）氏及び殖辺銀行事務員張逸材氏の演説、次に同校各課主任教員の黃添富氏、楊仲馨氏、張光裕氏、陳志仁氏、朱介孫氏、余裴山氏、倪壯青氏らの訓辞があった。次に新任の寄宿舎事務長周錫蕃氏が校規を発表し、整潔・静粛・謙和・誠敬・優美の五つのスローガンで学生を激励した。「商科の学生に対してこのような要求をするとは」⁽¹⁹⁾ 実に驚くべきものであった。…なお本科三年生は本学期で卒業するとのことである。

付録の「呉衡之重大事項年表稿」には、呉衡之は商業学校の創設に尽力した後、一九一五年十一月には年齢を理由に校長職を辞したとある（同月二十八日の『時報』広告）。務商中学は別人に引き継がれたものの、著名ジャーナリスト戈公振（一八九〇～一九三五）が翌年五月三日『時報』に報じた時評によれば財政的に継続困難となったという。時を同じくして呉衡之は南洋商業公学の校長となり、五月二十八日にはアメリカの児童教育者バセディ（アルファベット表記不明、中文表記巴雪棣）夫人を招聘し講演会を開催した。「女医モンテッソーリ（Maria Montessori、一八七〇～一九五二）氏が開発した新しい教育方法は欧米で行われ、著しい効果を上げている。アメリカのバセディ

夫人はこの教育法に精通し経験も豊富である。同夫人は今般上海に來臨し、幼児教育が未発達な我国に、その持てる知識を惜しみなく披露して同教育法を伝えた。昨日午後、北浙江路の南洋商業公学で同校の呉衡之校長の招待により講演し、学生や保護者及び各女学校の校長や教員ら幅広い聴衆にこの新しい教育法を伝授した。…夫人のスピーチは英語で行われ呉校長が通訳に当たった。次にバセディ夫人がモンテッソーリ教育の効用を説明し、一つ一つの教材について実際に子供に使わせながら説明した。またこれらは同校教員である米国イェール大卒の李照松が広東語に、英国バーミンガム大卒の梁樹劍が上海語に訳して、誰もがわかるよう、聴衆の理解を助ける進行であった。⁽²⁰⁾

この講演会は「終了時、時計は既に五時を回っていた」とあり、呉衡之の商業教育活動の魅力伝えて⁽²¹⁾いる。彼はいつも常に聴き手（スポンサー）視点で発想し、学生の力をうまく引き出しながら、細かいところまで気を遣った。一九三〇年、彼が雑誌『旅行月刊』第五卷第五期を編集した際には「海虞游記」を掲載し、編者の言葉を添えて成り立ちを説明した。「これは谷徳全君の力作で、私が民国五年（一九一六）南洋商業公学の校長となった時、門人の張廉に紹介されたものである。読んでみれば、良い文章で情景も素晴らしいので、大事に所蔵し、折に触れ読み返してきた。このたび本雑誌の同人が蘇州を遊覧するにあたり、謹んでこれを本号に掲載し、旅の道案内とするものである。谷君は私の掲載を許してくれるだろうか。谷君は今いずこに栄転されているものか、本篇を見たならば何とぞお知らせ願いたい。「稿料の相談も含め」面談を願う次第である。退翁呉衡之、謹んで記す。」一九三一年になると、呉衡之はかつて南洋商業公学の校長であった期間の一九一六年の十二名の商科卒業生、一九一七年の二十八名の商科卒業生と二十八名の銀

行科卒業生の卒業資格の問題に取り組み、妥当な解決策を求めて江蘇教育庁と争った。学生に対する配慮を忘れないその一貫した姿勢は印象的なものである。⁽²²⁾

二 中国「古画出洋」の推進者

文化的重商主義の語学翻訳における展開は限りなく多様な様相を見せた。世界芸術という概念の認識が具体的には中国絵画の国際市場の成立という形で実践されたのもその一つであり、これは二十世紀初期に新しい時代を切り開いたという点で、特に突出した意義をもっている。

中国絵画と書法が西洋人のコレクションの対象として関心を持たれるようになったのは比較的最近のことである。中国美術に対する欧米の認識の変化は、直接観察できる物質文化の変化に基づく部分が大きい。中国数千年の文

明は、歴代の美術品の中に最もわかりやすく具現化されるが、十八世紀から外国貿易を独占した広東十三行によって実質的に推進されたシノワズリ（中国装飾趣味、Chinoiserie）がヨーロッパで流行すると、中国との貿易により欧米各国にもたらされた装飾芸術、特に輸出向け陶磁器や輸出向け絵画（China Trade）がマーケットに影響を及ぼし、中国へ投資する外国商社の趣味を直接的に左右するようになった。上海開港以降出現した買弁階層にとって、彼ら自身と外国商社の雇用主との関係は業務上の連絡だけにとどまらず、仕事を離れた趣味のつきあいという個人的領域まで及んだ。買弁たちは業務以外に、陶磁器から書画までの個人的な美術品コレクションによって文化背景の優越を示すことに長けており、そうすることで中華の精神文明を物質的に示していたのである。そして買弁の生感を熟知していた呉衡之は、黄賓虹が言うように「広く学問に目を配り、中外の芸術に通じ、横文字に熟練し英文に精通しながら、周易による占いにまで造詣があった。そして中国全土を視野に入れる傍ら、画の六法即ち美術を研究し」⁽²³⁾（挿図2）、自分の専門知識を見事に駆使しながら、美術に関係する翻訳を受け持ったのである。

挿図3 ラトビア籍の画商スツラヘルネクの肖像
（モノクロ写真、1939年）

話は黄賓虹と欧米のコレクター、画商と古画の交易にまつわって展開した。鑑定家でありメディア人でもあるという二つの立場を一身に体現した黄賓虹こそ、間違いなくこの交流の核心たる人物であった。一九一三年七月、ラトビア国籍の画商スツラヘルネク^(訳註4) (E. A. Strahlneck, 一八七六?、挿図3)

挿図4 スウェーデン人コレクター ファーレウス、中国にて（モノクロ写真、1912～3年）

が最初の中国美術コレクションをスウェーデンの実業家クラス・ファールウス (Klas Fahraus、一八六三～一九四四、挿図4) に譲った。当該コレクション形成に関わった黄賓虹と呉衡之は、この時これを精細なカラー美術印刷で中英両語版の図録として出版することを提案し、実際一年以内に実現してみせた。それが『中華名画 スツラヘルネク所蔵作品影印本』⁽²⁴⁾である(挿図5・6)。

ここでは明らかに、商売と翻訳とメディアの三要素が全て揃っていたことが対外文化交流の前提であった。黄賓虹は自らこの図録の序言を書き、付録の「銅器総論」⁽²⁵⁾「磁器総論」⁽²⁶⁾「玉器総論」⁽²⁶⁾も執筆した。これら全ての英訳にあたったのは当然呉衡之にはかならない。そしてスツラヘルネクが英語で執筆した序文や本文、アイスコフ夫人 (Florence Ascough、中文名は愛詩客、愛士高など、一八七八～一九四二、挿図7)、デイビス (R. Wallace Davis)、ブ

挿図5 『中華名画 スツラヘルネク所蔵作品影印本』(1914年) 表紙

挿図6 スツラヘルネク古美術店 (Strehlneek's Gallery of Antique Chinese Art) の名刺 (1927年)

挿図7 任頤「五倫図」を蒐集し、その前に立つアイスコフ (モノクロ写真、1917年)

リックル (R. Bickel) から欧米人同志による英語の蔵品解説もまた「呉衡之君が単独で翻訳にあたり、特に尽力した」。中英両語完備のこの翻訳プロジェクトを通じ、呉衡之は美術鑑賞に精通していった。一九一三年十二月二十日、西洋人による中国名画コレクション展覧会において呉衡之は解説を担当した。新聞記事によれば、上海在住外国人の間で彼は非常に高い評価を得たようである。「西洋人ジェッセル (W. Jessel) 氏は当地イギリス租界博物院路の博物院の一階大広間で中国絵画の展覧会を開催。陳列品は宋元明の大家の画巻軸などで、宋画の諸葛武侯抱膝長吟図、元の墨竹、明の張夢晋人物巻、清代袁曜の山水などの名品の数々、ここに列挙できぬほどである。会場は中国西洋の名士で大いに賑わった。来場したコレクターはスツラヘルネク氏、ドゥボワ氏とその夫人、マンフェイト氏、スタンレー氏、アイスコフ氏とその夫人。絵画通の来賓はクローネンバーグ氏、(中略) 作品解説の通訳を務めたのは広東の呉衡之氏。玉や錦が各幅を飾り、古軸の芳香も相俟って、極めて盛況のひとつときであった。」⁽²⁷⁾

呉衡之が商務に携わると同時に『中華名画』の翻訳に参画したのは、呉が設立した務商中学の「中国与西洋の学識を授ける」という理念と合致するものであった。黄賓虹が主筆を務めた『神州日報』に、一九一三年十二月二十九日、三十一日「広東呉衡之訳、西洋人スツラヘルネク著」「中国名画コレクション序文」⁽²⁸⁾が連載され、スツラヘルネクが宣揚した世界芸術という概念が翻訳紹介されている。

上古の中国哲学の特徴は、西洋哲学の精神と対峙し相輝くもので、一に集いて群をなす「高次の存在である群の中に没入する」ことを旨とするものであり、そこに一個人の私的存在「Individualism」はない。これは天の演じるところであり、個人はその社会生活において、必ず家族から

小邦・国家へと、徐々に大なる組織に向かうのである。しかしてその宗教的帰依は(大乘教について言うならば)、その精神をあまねく全世界に広げ宇宙に満たすものである。悟りとして得られるのは、その現身は造化の中の一部「fraction」に過ぎぬという真相である。中国には道教と仏教の二つの教えがあるが、一は修練を主にし、一は悟りを主にして、異なる道筋を辿りながらも向かうところは同じ、共に一なる神の直覚に至るものである。(中略) 東洋人は天もまた魂をもつものとして、人と同じものの如く捉える。それに評議を加えたり審判で臨んだりはないのだ。一言で言うならば、東洋人は宇宙を領治の土地とせず、研究の地とせず、自己を誇るための材料としない。その持てる態度は、宇宙を造り治める主たる力をただ敬い頼るものである。(中略) 例えば霜降る岩、雪かぶる山嶺。或いは雨煙にけぶる江湖、或いは揺れ動く樹影、或いは険しくそそり立つ石、或いは花卉禽獸。中国絵画に描かれるこれらいずれもが観る者の感情に働きかけてくる。それが人の性情を陶冶し、またその志を奮い立たせるのは、自然の深遠なる道理に合致しているからだ。以下の歌を詠んでみれば、心にいくばくか思い描くことができよう。歌に曰く。

唯だ願う、あの山頂に登らんと

飄然として向かう、汝の宝光に

靈なる魂は岩洞を名残惜しみ

月照らす芳草を倍して逍遙す

『ファウスト』から引用したこれら数行の韻文が、中国山水画の素晴らしい作品を鑑賞する際、知らず知らずのうち我々の心に浮かぶ。これはゲーテが中国画の真髓を実に微細に体得し翻訳しているのだ。ゲーテ

は言う、「中国人の描く絵画風景は、自然で活力に溢れ、まるで人物画のようだ。」この言葉は、ゲーテの中国文学に関する議論「エッカーマンとの対話、第一巻」を、文学的含蓄に富む中国絵画に応用したものであり、実に力強い。一方、画家がこのような画面効果を生み出すために身につけた方法は、なんと簡素なものであることか。ゲーテはこの歌によって、絵画に描かれた物象を称えるのではなく、その妙なる着想を、その描かれた全精神を、見る者の心に印象づけようとしたのだ。^(訳註5)

これはゲーテ（一七四九〜一八三二）の世界文学理念を継承した考えであり、スツラヘルネクの「弁言」を貫いている。この文章冒頭で目を引くのは「芸術」と概念の関係についての認識である。「芸術は人類の文化と精神の進化が生み出したものという。芸術は人が生命を寄せるものであり、心と魂の発達を示すものであるから、それは必然的に生命と心魂の表証なのである。それゆえに人はまずその精神的な全体像を感得し、芸術家と共感し同情する。それから一つの芸術作品において、芸術家が見て感じたところを感じるのである。それゆえに、人が内的知覚の境界を拡張することを欲すれば、外なる見方を獲得するために、特別な能力が必要不可欠である。」スツラヘルネクは文章の結びにイギリスの美学者ジョン・ラスキン（一八一九〜一九〇〇）を引用し、中国と西洋の文芸交流の認識の前提を再び述べ、世界美術という概念の重要性を強調した。「思うに、我が西洋人の中国絵画に対する無関心は、真正なる名画の特性を研究する機会がなかったことによるものだろう。しかしながら、人の芸術の理解はまさしくその哲学体系に基づくのである。東西各々の生命の観念が異なるがゆえに、しぜん好む感覚の赴くところ表れるものも異なるのではないか。英国のラスキンの言葉に曰く「万物の姿態

は必ずその生物の娛しむところのものと関係あり。またその生物が享受する度量は、その誠意致知と比例する」と。まさに至言である。この文章のためにこれを引用するものである。」

スツラヘルネクは画商という立場であったから、彼がなした中国と西洋の芸術、哲学、宗教の比較は、芸術作品が特殊な商品となる現実の中に結実しなければならなかった。換言すれば、彼は取扱う中国絵画の価値を判断し、その市場価格を決める必要があったのである。このことは、西洋人が世界芸術の全体像の中で中国絵画を認識しその価値を判断する上で、相当大きな影響をもつことになった。スツラヘルネクは「中国絵画の傑作は唐、宋、元から明初までが多く、その後の優れた作品は、だいたい以前の古名画を臨模したもの」との見方であった。明中期以降の古画模倣の画風について、彼は再び『ゲーテ談芸録』を引いて言う。「『談芸録』曰く、新画に俗気が多いのは、それが新しいからではなく、それが弱く病んでいるからだ。古画に雅意が多いのは、それが古いからではなく、それが健やかで生命力に溢れているからである。この基準をもって画を判断することができるならば、自ずと見識を身につけると喧伝するより更に説得力をもったのは、スツラヘルネクが古美術を扱う一方で古学を尊重したことであった。これは当時中国思想界で「天演論（社会進化学説）」が圧倒的優勢であった状況に反するもので、一九一〇年代の上海画壇の人々の目を覚まさせるきっかけとなった。呉昌碩や黄賓虹らが国粹文化の伝統を肯定するに至ったのは、この啓発によるところが大きい。『中華名画』の序において、呉昌碩も黄賓虹も「古物が劫火に焼かれ灰に帰し」「古学の精華が座視する間に凋落し、日々淘汰されゆく」状況に深い憂慮を示し、その原因を「西欧化が進み、中国人が物質文明だけを崇めるように

なった」ことに求めている。世界の古美術市場が開かれた今、中国の精神文明の化身である金石書画が、中国人に改めて自らの伝統を指し示し、文化的自己卑下の精神状態からの方向転換を可能にする。これは中国伝統絵画が直面していたジレンマに対する格好の答えであった。即ち、一方では美術は社会進化の立場から市場化する必要があり、人類の発展に有益な精神的なものを生み出す必要があった。もう一方ではまさにこの市場によって、西洋では中国古典芸術の購買意欲が高まり、上海の画家達は呉昌碩や黄賓虹らの指導の下、「与古為徒（古いものの弟子となり学ぶ）」から「与古為新（古いものこそ革新の源）」へと転じ、芸術創造の活力を生み出すことになったのである。⁽²⁹⁾

スツラヘルネクの「画の理を見分け、禅悦を悟る⁽³⁰⁾」という「弁言」と呼応して、『神州日報』主筆の汪允宗（一八七二―一九一八）は「圓照⁽³¹⁾」の筆名で、一九一四年七月九日の社説「中国美術の西洋への輸出」で「弁言」の要点を更に簡潔にまとめている。「東西の学芸の違いについて述べよう。東の学芸はもともと天然の状態があり、それをなぞるもの。西の学芸は厳整なる幾何学（形）に基づき数学（数）に根ざすものである。ゆえに東洋の絵画はおおらかなもの・精緻を超えるものを貴び、筆墨の外に神なる味を得ようとする。西洋の絵画は精密に物体を描くのを良しとし、描かれたものの中に心の内なる形象を表わす。仏教が法門を諭える言い方を借りれば、東洋芸術は精神（空）を貴び、西洋芸術は写実（有）を崇めるといえよう。今日の世界は東と西が繋がり、液体のように互いに混じり合い、空と有とが融合して、まるで一つの太極図のように完全なる境地を作り出しているのだ。」ここに挙げたスツラヘルネク、その中国語訳者呉衡之、或いは呉昌碩、黄賓虹、或いはメディア人汪允宗、彼らは全て中国の精神文明を「世界芸術」という概念の中に新たに定位することを企図していたのである。

今より百年以上前に、翻訳家としての呉衡之は、文言文でもって世界芸術という概念を紹介した。「琴を弾じるにおいては宗炳の雅懷の儕、美文を繰り出すにおいては陳思の綺采に属す⁽³¹⁾」と黄賓虹が賞賛したように、文章の前後を繋ぎ、一気呵成に表現した。「信・達・雅^(訳註6)」という尺度で測るなら、呉衡之の翻訳は欧州の画商の審美的主張を伝えているが、それと同時に、「クロスコンテクスト」のパラダイムにおいて、比較文学と比較芸術の魅力を体現している。白話文運動出現の直前であって呉衡之が翻訳した芸術理論の訳文は、彼が一九二〇年代に欧米現代文学の翻訳に従事する中で形成した訳文スタイルと比較すると、時代特性を反映したものである。この特性に基づき、呉衡之は読者ターゲットを当時の社会のエリート層に定めた。またこれは実務家としての現実的な検討を経たものでもあった。なぜなら『中華名画』は元々コレクターが収蔵するタイプのカタログ本で、定価は銀貨二十元、一九一四年の上海の中流家庭の月収の半月分にも相当したからである。ここで商業英語がいかにかに中国画の国内外マーケットに影響したかについて見るなら、施徳之（*Star Talbot*、一八七二―一九三五、挿図8）の事例が参考になろう。施は広東籍の中英混血の人物で、呉衡之とほぼ前後して香港から上海に移り商売をした。まず広東人が得意とする商業撮影によって上海の市場に新局面を切り開き、その写真は同業者中で四天王と呼ばれるようになった。その後全国で「神功済衆水」を販売し、莫大な利益を得ると同時に、『中華名画』にヒントを得て古画取引に投資し、いわゆる乾隆内府「古月軒」の彩色陶磁を複製して、上海の古美術市場の成立に貢献した人物である。彼は上海で名声を馳せたが、身の程をよくわきまえていた。自分の英語での交際能力を考慮して、古美術交易を含む自分の商いの顧客を国内市場（「本荘」という）に限定したのである。スツラヘルネクが得意とした国際市場（「洋荘」という）

とは棲み分けたわけで、英語の重要性をよく示している。⁽³²⁾

一九二四年三月十六日、呉衡之は閩北華興路二九六号四室の自宅で小さな古画展覧会を開催した。『申報』の「古画展覧会本日開催」という記事によれば、「閩北の粵商医院右の退蔵廬は呉衡之君の別荘で、極めて閑雅な立地に非常に凝った造作である。呉君は国内で見事なコレクションを有する某君と親しく、その宋元明清大家の書画名品多数を並べ、今週日曜日午後、同所にて展覧会を開催する。」この二日前、予告報道があった。「最近安徽名士の黄氏は先祖が珍蔵したる宋元明清四代の名人名画を携え上海に来たる。その意は珍藏名画を新たに表装するにあるが、上海の好古人士及び古美術識者たちの広く知るところとなり、上海での展覧を求む声あり、これをもって国粹を表彰せんと。黄氏ついにその要請を承諾し、本月十六日即ち旧曆二月十二日午後二時に時を定め、閩北公興路天通庵路粵商医院右側通閣路石橋北端の

挿図 8 施徳之夫婦 (モノクロ写真、1899年)

退蔵室を借りて陳列し、もって衆覧に供す。内に数十幅余の貴重なる精品あり、実に現時希少なるものと云う。⁽³³⁾」半日の展覧会が開催された三日後、『申報』は「古画展覧会を參觀して」というフォロー記事を掲載した。これは呉衡之の上海各界にわたる人脈を示しており、中には広東籍のコレクターや「西洋人スツラヘルネクラ」の名も見える。⁽³⁴⁾ 持てる手腕をうまく振るうその姿から、十一年前に上海博物院で開催した西洋人士コレクション中国絵画展が思い起こされる。当時の呉は絵画解説を翻訳し語る立場であったが、今や呉衡之の上海での実力は「好古人士及び古美術識者」を対象とした展覧会を企画するまでに至った。また以前の仲間スツラヘルネクや黄賓虹と再会している点も実に味わい深い。呉衡之の渉外経歴がこのように謎に満ちていることに照らせば、呉衡之が一九一四年に黄賓虹を務商中学の理事に招き、秋期始業式の来賓として講演を依頼した意図についても、我々はより深く理解できよう。

呉衡之は上海の自宅で古美術界に向け小規模な絵画展覧会を行うにあたり、入場料を取らずに開催できたが、立派な体裁を整え出費がかさんだことは想像に難くない。この雅集は、呉衡之の広州での業務上の交際と相まって、彼の経済活動に一つの補足説明を提供するものである。本文冒頭の挿図1で示したように、一九二二年二月一日、呉衡之は広東順徳の蔡哲夫（一八七九〜一九四一）、広東嘉応の謝英伯（一八八二〜一九三九）、広東番禺の高剣父（一八七九〜一九五二）、および安徽の黄樸存（賓虹）の紹介により、南社の第一〇九五入目の会員となった。⁽³⁶⁾ なぜ呉衡之はこの時、この中国で最も影響力ある全国的な詩社に加入したのだろうか。⁽³⁷⁾ 一九〇九年、南社初の蘇州の雅会に参加した十七名の元老の中に黄賓虹と蔡守（字は哲夫）⁽³⁸⁾ がいた。李若晴の考察によれば、蔡守は当時李根源（一八七九〜一九六五、南社メンバー）

の政治上の失敗のため香江に蟄居して古美術販売で生計を得ていた。蔡守は南社の広東分社を創立しているため、呉衡之が加入した南社もこの分社である可能性が高いという。⁽³⁹⁾ 呉衡之は入社書の連絡先に上海ではなく広州を選び、河南洗桶西約土代巷善慶里五号と記しており、これはその業務上、広州が重要であったことを意味しているのである。高剣父はただ「革命画家」という立場によって上海に「折衷派」画風を生み出しただけでなく、嶺南という辛亥革命の拠点に幅広い人脈を持ち、一九二〇年十月からは広東省立第一甲種工業学校の校長となつて順調満帆なひとときを過ごしていた。そして呉衡之を南社に加入させるべく紹介したのもちようどこの時期、一九二一年一月であつた。⁽⁴⁰⁾ 一九二四年春、呉衡之は広州の業務に関する仲裁を高剣父に依頼した。その仲介をしたのは黄賓虹であつた。このことは高剣父が黄賓虹に送った手紙(挿図9)に見えるが、関係は実に微妙である。「樸存先生、昨日御手紙拝受いたしました。この秋、梅光培庁長が離職され、鄭鴻年氏が庁

挿図9 高剣父が黄賓虹宛てた書簡(1924年3月26日)

長を引き継がれました。庁内の職員も異動が多いため、鄭庁長を直接訪ねこの件について話しましたところ、東門外院の丘の前の土地は既に許可も出ており、計画をなかつたことには致しかねる等のお話で、お手数ながら引受人を探して交渉せねばなりませんまいが、私はその者と面識がなく、無力でありますため、御依頼にお応えできず、近々上海に伺い拝眉の上お話ししたく存じます。私は先月より上海に参りたいとかねがね思っておりましたが、事情によりかなわず、御返事も遅くなつてしまい、誠に申し訳ございません。平にお許し願います。衡之先生に対し、私に代わつて先にお詫び下さいますようお願い申し上げます。

挿図10 梅光培書簡(1923年10月8日)

う、お願い申し上げます。第二です。高剣父頓首、二十六日。⁽⁴¹⁾ これは些末な資料に見えるが、呉衡之が広州で不動産業に投資していたことを示すものである。李若晴の分析によれば「一九三三年一月、陳炯明(一八七八〜一九三三)は雲南・広西・広東連合軍よりなる西路討賦軍の攻撃に敗れて惠州に退き、孫文(中山、一八六六〜一九二五)が広州を再び掌握した。軍資金をまかなうために孫文

は息子の孫科（一八九一～一九七三）を広州市長に命じ軍資調達にあたらせた。資金獲得が最も容易な煙草税と賭博税は雲南軍と広西軍に押さえられ手出しができなかったため、孫科はやむなく寺院の財産を没収し土地を売却することで軍資金をかきあつめた。当時こうして売られたのは主に東山地区（即ち高剣父の手紙にある東門外）であり、土地を転がして一財産を築いた者は少なくない。また少なからぬ華僑が帰国して東山の不動産を買ったため、民国時期の東山は広州の富裕地区となり、今に至るも高位高官の旧宅が数多く残されている（挿図10）。呉衡之はおそらくこれらの取引に関わるやり手であったと思われる。⁽⁴²⁾

三 同時代女性画家の国際エージェント

一九一九年十月十日の双十節（中華民国国慶日）に黄賓虹は「古画出洋（古

画海を渡る）」を発表して「洋莊（中国絵画の国際市場）」の経営モデルを略述⁽⁴³⁾したが、この時呉衡之もまた黄賓虹及び『中華名画』に関わったもう一人の仲間アイスコフとの共同作業に忙しかった⁽⁴⁴⁾。西洋社会に向け現代女性画家呉淑娟（一八五三～一九三〇、号は杏芬女士）の山水画を紹介する『中華名勝図説』（以下『図説』と略記する）を編訳していたのである。

女性画家を選んで対外的に宣伝するのは、呉衡之の商業実践における新しい試みであった。だがもともと、呉衡之は初めて現代中国名画図録を中英両語で編集したわけではなく、また最初に英文で呉杏芬を紹介したわけでもない。『中華名画』カタログの完成後、アイスコフは夫のフランシス・アイスコフ（一八五九～一九三三）の祥泰洋行（スコット・ハーディング商会）の買弁であった定海人、劉松甫のために英語の『中国古今名人図画録』（挿図11）を編纂し、一九一五年にサンフランシスコで開催されたパナマ・太平洋万国

挿図11 アイスコフ編訳『中国古今名人図画録』（1915年）表紙

挿図12 陳国権編訳『中国近世世界大画家呉杏芬画』（1915年）表紙

博覧会に参加し、海上画派の書画作品を主としたコレクションを展示出品している。⁽⁴⁵⁾ また同年、南京の著名な時評家陳国権（一八七五〜？）が画集『中国近世女界大画家吳杏芬画』（挿図12）を編集出版し、⁽⁴⁶⁾ 英語で西洋人に中国の同時代の女性画家を紹介していた。しかし「古画出洋」のモデルから見ると、陳が力を借りることができたのは威海衛のイギリス総督ジェイムス・スチュワート・ロックハート卿（一八五八〜一九三七）と上海の書画家で『海上墨林』の編者でもある楊逸（一八二四〜一九二九）だけで、これ以外の各界の著名人はいなかったため、市場効果は思わしくなかった。

このような状況下で吳衡之は改めて『図説』企画の任務を引き継いだ。彼は自序の中で率直に述べている。「御子息吉生氏は度々母上吳杏芬夫人の教訓を紹介され、その作品を示された。私は夫人が慈善をよくされるその誠意に感じるところがあり、不覚にも自分の学識が浅薄なのを忘れ、はからずも本書を編訳することとなった。これは敢えて驥尾^{きび}に付すのではなく、ただ善行を称揚したいとの思いからである。本書の成書にあたり、ここにその縁起を序す。」吉生即ち唐熊（一八九二〜？）は、『図説』に十八幅の中華名勝山水を描いた吳杏芬の息子である。自身も画家である唐熊は鋭敏な市場感覚を持ち、母の作品を売り上げるため陰日向になり積極的に動き全力を傾注した。

陳と吳の二つの序文を比べればわかることだが、彼らはいずれも「洋莊（海外向け市場）」の扱う古画の真贋問題について十分に承知していた。⁽⁴⁷⁾ だからこそ吳衡之の自序は苦しい弁明から始まる。「中国美術の精巧さ美しさは文明世界諸国からたびたび賞賛されてきた。中でも特に絵画である。中国の絵画芸術は上古に發明され、唐宋に至って盛大の極みに至った。宗派もまたここから分かれた。大儒の学者から出た名家は少なくなく、閨房の女性画家に

も佳作はまた多い。清末に至り旧来の学問は廃れ人材も殆ど出なくなった。書画芸術は退歩するばかりで進歩がなく、全く今昔の感に堪えない。中国内外の人士は精美なる中国古画が貴重だと知っている。争って大金を積み、買収した珍品は深蔵して人には見せない。古哲の真蹟を一目見てその宗派を識別したいと願おうともその機会は得がたく、全く遺憾なことである。」陳国権が『中華名画』の負の側面を指摘したことを考慮し、吳衡之は中国内外の二名の友人に依頼して過去の出版事業に触れてもらい、イメージ挽回を図った。許默齋（一八七三〜一九二五）はこう書いた。「香山の吳衡之先生が編訳した中英両語の出版物は精義を解明しつつ逸品を並べており、双方相まって益々素晴らしい著作である。吳先生は品高く学深く、社会的地位の追求にあくせくしない。上海に寓居すること三十年、半生を教育事業に捧げた他、新聞社を興し学会を設立するなど、およそ社会に役立つことには労苦を厭うことなく向かってこられた。ゆえにその業績は顕著であり、広く知られるところである。民国建国以来、国粹美術の学問に尽力され、金石書画を専心研究して著書多数、スツラヘルネク『中華名画』はその最も顕著なものである。中国西洋の人々、皆これを好古の道標^{みちしるべ}と見ている。⁽⁴⁸⁾ 一方、上海のアメリカ人牧師モーガン（Rev. E. Morgan）は短い序文の最後を「吳衡之は早年スツラヘルネクの『中華名画』編集に協力し美術界に名声を博した⁽⁴⁹⁾」との一文で締めくくったが、その言わんとするところは明白である。

陳国権が吳杏芬を売り出したのは、わかりやすく言えば同時代絵画の収集については真偽鑑定がまだ問題にならないからである。⁽⁵⁰⁾ この他に、陳はこれによって女性画家に対する歴代の無視や偏見を正したいとも考えていた⁽⁵¹⁾（挿図13）。これには吳衡之も強く賛同していた。ドイツ人医師でコレクターでもあったドゥボワ（Prof. Claude de Bois-Reymond、一八五六〜一九二五）の夫人

やアイスコフ等の在中外国人との交流の中で、女性が芸術の援助者になることの重要性を呉衡之ははっきり認識していたので、⁽⁵²⁾同時代の著名書画家四名を並べて比較する際に女性芸術家という属性を強調し、その論を説得力あるものにした。

上海は近來文人墨客が集まる地となった。一芸に秀でた者は相連れ集い来る、まさに水が谷に集まるようである。近頃書画家では誰もが四呉を称え、その名は海外にまで聞こえている。四呉とは、呉昌碩、呉石仙の二氏と呉杏芬、呉芝瑛の二女史である。呉昌碩は書画共によくし、筆力雄健、意態奇古にして、東瀛（日本）の人々に人気がある。石仙は画に優れ、生き生きと際立つ自然風景を描き、フランスやドイツの人々に大変好まれる。呉芝瑛は書に秀で、筆法は挺秀、堂々と力強くかつ美しく、アメリカの紳士淑女が宝とする。呉杏芬婦人は書画共に優れるも特に画が勝り、その作品は画の六法を兼備し、あらゆる題材を描いて皆素晴らしい。一筆一墨に全て由来があり、腕前も確かなら見識も広い。ゆえに筆を揮えば古人に迫る勢いである。最近の収蔵家は古代の名人の筆墨を

挿図13 呉杏芬「滕王閣図」、『中国近世女界大画家呉杏芬画』（1915年）

求めたがり、指名してこれを市場に求めるが、それを得るのは容易（たやす）くはいばかりか、例え入手できてもその真贋は非常に判断が難しいものである。今呉杏芬夫人が選んで臨模した名作およそ十数種を得て、古の哲人の筆墨の形神（かたちと気品）を見てみたいという同好の士の希望に込めることができるのは、実に幸甚なことである。

このように性別と個人の作風を対比することで、読者は呉杏芬の山水について更に具体的に理解することができた。「夫人は安徽省歙（しやう）邑の呉子嘉先生の令嬢であり、前任太守の唐昆華氏の令室である。夫人は作画に優れた呉子嘉先生に幼少時から家庭教育を受け、また唐氏の極めて豊富な収蔵により古今の名画真蹟を朝に夕に見て学び、造詣を更に深くした。更に夫人はもともと山水を好み、國中の名勝にくまなく足を運び、旅を終え帰宅するたびにその景を思い出しては作画して座右に掛け、卧遊の友とした。夫人が作った十八省名勝図はその景が真に迫っているばかりか、歴代各家の筆法で描き分けたもので、過日の展示で掛け並べられると諸大家が一堂に集まったかのようにだった。これを見た者は中国人西洋人を問わず、ただひたすら嘆声をあげながら見入るばかりであった。中国の国粹文化が日々忘れられていく中、夫人が古学を保全していることは、我等には恩恵であり、その業績が保たれるわけに思いをいたすべきものである。近日我が国の女性において書画で名を馳せる者は、ただ夫人と呉芝瑛のみ。呉芝瑛は数年の心血を注いで楞嚴経を写経し刊行したが、その原本はアメリカ人が買い求め室を建てて珍藏したとのことである。夫人の佳作が国事混乱の折り、俗世間を離れた桃源郷を得て護蔵されるのは幸甚である。」

前述の通り、呉衡之は南洋商業公学校長に在任中、アメリカの児童教育家

バセデイ夫人を招いて講演会を行ったが、同時に女性向け『香艶雑誌』に記事を出し、幼児教育と女性の覚醒との関連に意識的であることを示した。⁽⁵⁴⁾ 呉衡之の自序に対して許黙齋は序文で『図説』の価値を強調した。「このたびの出版は美術界にまた異彩を放つものである。」⁽⁵⁵⁾ モーガン牧師も呉衡之に敬意を表した。黄賓虹はやや後に芸術史で意見を表明した。「私と同郷で唐吉生君の母、呉夫人が作られた中華名勝の画十余幅を求めれば、それらは順を追って画理を解き明かし、源流を区別し、南宗北宗の画風、李思訓父子が代表する青緑山水と王維が代表する水墨山水の軌の異なるを弁別する。東西の学派を繋げ、欧州とアジアを結んで、翰墨を流伝せしめ、丹青即ち絵画を輝かせるものである。」

呉衡之が一九二六年に『図説』を改訂再版したところを見ると、一九一九

挿図14 呉衡之編訳『中華名勝図説』修訂版(1926年)目次

年の初版の売れ行きは悪くなく、呉は引き続き唐熊と共に呉杏芬のマネージャーとして現実的な利益を得ることができたようである。「この本の購入、原画の観覧、或いは呉夫人の作品をご希望の方は、上海閘北鴻興路華興里第四街底退藏廬、呉衡之先生にお問合せください。」⁽⁵⁶⁾ 呉衡之はその人脈を頼りに再び中国内外の要人に序文を要請した(挿図14)。一九二二年春、直隸軍閥上將の呉子玉(佩孚、一八七四〜一九三九)が登場し、序文の中で責任者の苦勞に触れている。「呉衡之君は序文を撰し、また描かれた画境、画法の由来を外国語により解説し、もって外邦に紹介し中国川岳の美を卧遊せしめる。古を借りて今人の造詣の精を窺うものなり。」⁽⁵⁷⁾ 駐上海アメリカ総領事カニングハム(Edwin S. Cunningham、一八六八〜?)⁽⁵⁸⁾ と領事館職員ヘレン・チャピン(Helen B. Chapin、中国名蔡彬華、一八九二〜一九五〇)は、改訂版出版直

挿図15 『中華名勝図説』在上海アメリカ総領事カニングハムの序文(1926年)

前の四月二十二日と二十三日にそれぞれ二序を増補し、改訂本を引き立てた。カニングハムは、一九二六年のアメリカ独立百五十年記念フィラデルフィア万国博覧会に呉杏芬の山水画が出品されることに感謝を表し、それが両国の文化交流を推進する事は疑いようがないと述べた（挿図15）。チャピンはフィラデルフィア出身であるため、この出品の実現の為に遊説で協力した可能性がある⁽⁵⁹⁾。だがより重要なのは彼女がもとは美術史家であったこと⁽⁶⁰⁾で、チャピンが序文で呉衡之による呉杏芬作品の紹介を高く評価したこと⁽⁶¹⁾は、世界芸術の概念から、中国現代女性画家の位置を定義したものとと言える。

四 「世界文学」の翻訳紹介者

文化的重商主義が翻訳に反映されることによる影響は、世界文学という概念の揭示において更に大きいものがあつた。呉衡之が翻訳した同時代の欧米文学作品は幻想小説からリアリズムの純文学小説まで様々なジャンルにわたる。彼の眼は並々ならぬもので、中国と西洋との文化交流に新局面をもたらす一助となつた。

第一章で論じたように、一九二一年九月十六日、王雲五は胡適の推薦により商務印書館の編訳所の職に就き、翌年一月には所長となつた⁽⁶²⁾。同月三日、王雲五は二十年前に通つた英語塾の講師であり同郷であり親戚でもある呉衡之を紹介し入所させた。給与は百元であつた⁽⁶³⁾。王雲五が自分に近い人間を引き入れたのは、明らかに、自分が改革に大鉦を振るう上で手足となつてもらうためであつた⁽⁶⁴⁾。呉衡之にとつては、これは商務英語の教育実践に努めた成果であつた。一九一四年にまさに商務印書館から出版された呉衡之訳『中華名画』は、あたかも中国と外国との芸術交流特使としての呉衡之の最初の名刺のようなものであつた。この時の翻訳が画商の利益に動かされたものと

言うならば、一九二二年以降、呉が商務印書館編訳所で三種の世界現代文学作品の翻訳を完成させたのは、かなりの程度で翻訳者本人の興味の方向性を示したものである。つまるところ、文学の商品価値は、世界芸術という概念より更に広範な社会的影響をもつものである。

呉衡之の商務印書館入社時の書類では、所属部門は空欄になっており、呉は仕事上相当に融通をきかせて行動することができた⁽⁶⁵⁾。英中辞典編纂について述べる前に、一九二四年二月に出版された『第一回中国年鑑』について触れておきたい（挿図16）。呉衡之はこの編集に関わつたことによつて、黄賓虹に直接の影響を与えただけでなく、同時代の欧米の文壇の動向に精通することになつた。さて数多い外国語辞典漢訳の仕事の中で、呉衡之は一九二八年の『総合英漢大辞典』(A Comprehensive English-Chinese Dictionary)の出版に参加した。同書の編者は黄士復と江鉄、校訂者は王雲五、何松齡、陳承沢である⁽⁶⁷⁾。初版は二冊に分かれ、各冊が正・補編に分かれた。一九三七年の改訂時

挿図16 『第一回中国年鑑』(1924年) 奥付

に一冊になり、一九四八年までに八版を重ねた。単語、複合語、略語、地名、人名、洗札名の語を収め、合計十三万条を超える情報量である。このような辞書の普及が中国文化の発達に与えた影響は計り知れない。⁽⁶⁸⁾これは基本的な情報の獲得手段としての出版物であり、王雲五が主宰した商務印書館編訳所のビジョンがひとときわ秀でていたことを示している。

辞書の編纂から欧米文学作品の翻訳へ話題を移す。呉衡之は商務印書館が組織的に取り組んだ『野人記(ターザン)』(The Tarzan Series、或いは『人猿ターザン』シリーズ)の翻訳を引き受けた。これはアメリカの小説家エドガー・ライス・バロース(Edgar Rice Burroughs、一八七五～一九五〇)の作品である。その一方で、呉は上海在住アメリカ人の人脈を通じて直接作品を選び、アンソロジー『最近名家小説訳叢』上下冊と、一九二五年にオー・ヘンリー短編小説賞を獲得した小説家シャーウッド・アンダーソン(Sherwood Anderson、一八七六～一九四一)の名作『帰来』⁽⁷⁰⁾を翻訳した。本稿が英語原文の出版状況から追って比較するのは、呉衡之のこれら三種の訳書に興味をもつ読者のために、翻訳文学史の基本知識を提供するためである。

これらは集団プロジェクトか単独仕事かという違いもあるが、訳者の観点や趣味、情報のリソースも異なる訳訳である。『総合英漢大辞典』出版のその年、呉衡之はバロースの『宝窟生還記』(邦訳「ターザンと黄金の獅子」^(訳註)、挿図17)を訳しており、⁽⁷¹⁾これは『小説世界叢刊』の「野人記(ターザン)」シリーズの第九編に収められた。⁽⁷²⁾呉衡之が同書を翻訳していた頃、南社の古参メンバーである胡寄塵(一八八六～一九三八、名は懐琛、字の寄塵を通名とする)が呉と会い、互いに詩を贈りあっている。この詩が「野人記」に触れており、当時流行の話題だったことがわかる。⁽⁷³⁾

木落江南秋暮天、高齋此日集群賢。性情結友先遺俗、湖海論文不問年。
樽外滄桑付塵夢、琴辺談笑亦因緣。野人飽啖葷菜果、却負肥魚大肉鮮。

バロースの奇想天外な空想小説であるターザンのシリーズは、一九二二年に第一部「伝奇の誕生」(原題「Tarzan of the Apes」、中文訳は他に「猿人記」「人猿ターザン」等。邦訳は「類猿人ターザン」)が発表され一世を風靡した。その人気は衰えぬまま一九四七年の「窮地の軍団」(Tarzan and the Foreign Legion、邦訳「ターザンと外人部隊」)まで続き、これに彼の死後整理された二編まで含めて、全二十作品が出版された。中国で最初にこのシリーズを翻訳紹介したのは、アメリカ留学で英文を学んだ胡憲生(一八九〇～一九五七)であり、『小説世界』第一卷十二期から第四卷三期まで(一九二三年三月二十三日から十月十九日まで、挿図18)連載された。当雑誌記者の識語は、世界ではほぼ同

挿図17 バロース著・呉衡之訳『宝窟生還記(Tarzan and the Golden Lion)』(1928年)表紙

挿図18 胡憲生訳「野人記(Tarzan of the Apes)」『小説世界』(1923年)

文中の長編映画とは実際は無声映画シリーズであり、ハリウッド、上海を始め世界各地で上映されて、空想小説やフィクション映画の流行に火をつけた。一九四九年(新中国成立)以前に数名の翻訳家がシリーズで翻訳した。⁽⁷⁴⁾一九四九年以降は、香港台湾と中国本土では異なる様相を見せたが、欧米の大衆文化におけると同様、中国人がターザンに寄せる好意は今も衰えていない。⁽⁷⁶⁾その原型となったのは商務印書館の『野人記』シリーズ十編であり、一九三八年に定価四元六角の箱入りセットとして出版されたものである。内容は以下の通りである。

- 『猿人記』[邦題：類猿人ターザン] (原題：Tarzan of the Apes) 胡憲生訳、一九二五年、定価四角
 - 『還郷記』[ターザンの復讐] (The Return of Tarzan) 曹梁厦 (一八八六～一九五七) 訳、一九二五年、定価四角
 - 『猿虎記』[ターザンの凱歌] (The Beasts of Tarzan) 兪天游 (一八七五～一九二七) 訳、一九二七年、定価四角
 - 『弱歳投荒録』[ターザンの逆襲] (The Son of Tarzan) 二冊、兪天游訳、一九二七年、定価四角
 - 『古城得宝録』[ターザンとアトランティスの秘宝] (Tarzan and the Jewels of Opar) 二冊、兪天游訳、一九二七年、定価四角
 - 『獸王豪傑録』[ターザンの密林物語] (Jungle Tales of Tarzan) 二冊、李毓芬訳、一九二八年、定価四角
 - 『復巢記』[野獸王ターザン] (Tarzan the Unnamed) 三冊、兪天游訳、一九二七年、定価五角五分
 - 『重圓記』[恐怖王ターザン] (Tarzan the Terrible) 四冊、張碧梧 (一八九七～?)
- この小説はアメリカでは既に長編映画化され、上海での上映時には大変な反響であった。意表を突く驚天動地のストーリーである。このたび当小説が米国留学の文学者胡憲生先生により漢訳され、まさに筆の乗った名訳となった。これにオランウータンや怪獣珍鳥などの挿絵がたくさん添えられ、読者諸君は小説を読みながら物語世界の中にいるかのように感じられるだろう。また新知識もいささか身につくようになっており、小説界に新局面を開いたものである。(中略) 当映画をまだ見ぬ者は是非この小説を読まねばならぬ、映画を見た者は更にこれを読まねばならぬ。以後続々刊行、読者諸君の注目を請う次第。

訳、一九二七年、定価五角五分

『宝窟生還記』[ターザンと黄金の獅子] (*Tanzan and the Golden Lion*) 三冊、

呉衡之訳、一九二八年、定価五角五分

『倭城歴険記』[ターザンと蟻人間] (*Tanzan and the Ant Men*) 二冊、張桐館訳、

一九二八年、定価五角五分

商務印書館の翻訳プロジェクトの中で、胡憲生、曹梁厦、俞天游は間違いなく中核メンバーであった。彼らは複数の外国語を習得していただけでなく、留学と渉外の経験を結びつけ、白話文での著述を提唱するなど、突出する貢献を残した。胡適や趙元任(一八九二-一九八二)らとコーネル大学の同窓であった胡憲生は、ニューヨーク州イサカという「現代白話文の揺籃」で数年間薫陶を受けていたからこそ「まさに筆の乗った名訳」をものにする⁽⁷⁷⁾ことができた。また翻訳における再創作の問題や、中国の古典的章回体(全体を多くの回に分け、各回に内容概略風のタイトルを付す)形式をいかに改造するかに関しても、胡は独自の見解を見せた⁽⁷⁸⁾。

現代中国語の発展という観点から見れば、呉衡之のこのプロジェクトへの参加は間違いなく挑戦であったといえる。呉衡之の『中華名画』の翻訳は文語体であった。だが『中華名勝図説』はやや口語体に近く、『宝窟生還記』では相当に口語体の度合いを強めて、あらゆる読者が読めるものになった⁽⁷⁹⁾。胡憲生と同様に、呉衡之は第九編を訳した。目次は以下の通りである⁽⁸⁰⁾。

- 第一回 金毛獅 [邦訳：黄金のライオン]^(訳註80) (原題：The Golden Lion)
- 第二回 訓練 [ジャド・バル・ジャの訓練] (The Training of Jad-bal-ja)
- 第三回 神秘的会議 [謎の会合] (The Meeting of Mystery)
- 第四回 荒林人跡 [足跡は語る] (What Footprints Told)

- 第五回 致命傷 [死の飲み物] (The Fatal Drops)
- 第六回 生死関頭 [心の傷あと] (Death Steals Behind)
- 第七回 活祭 [愛にそむいて] ("You Must Sacrifice Him")
- 第八回 詭計 [過去の謎] (Mystery of the Past)
- 第九回 死鏃 [死の槍] (The Shaft of Death)
- 第十回 離奇変幻 [狂気の策] (Mad Treachery)
- 第十一回 異香 [香をたく] (Strange Incense Burns)
- 第十二回 金磚 [金塊] (The Golden Ingots)
- 第十三回 怪異的平台 [虜囚] (A Strange, Flat Tower)
- 第十四回 恐怖之室 [修羅場] (The Chamber of Terrors)
- 第十五回 血図 [血染めの地図] (The Map of Blood)
- 第十六回 金剛鑽窟 [ダイヤモンドの宝庫] (The Diamond Hoard)
- 第十七回 火刑 [焼死体] (The Torment of Fire)
- 第十八回 仇跡 [復讐への道] (The Spoor of Revenge)
- 第十九回 相残 [死の脱出] (A Barbed Shaft Kills)
- 第二十回 死回 [よみがえった死者] (The Dead Return)
- 第二十一回 終身監禁 [終身刑] (An Escape and a Capture)

『宝窟生還記』の英文原書の売れ行きは好調であったらしく、一九二三年の小説発表後、一九二七年にはサイレント映画化された(映画邦題：獅子王ターザン)(挿図19)。ハリウッドスターのジェームズ・ピアース (James Pierce 一九〇〇-八三)、ドロシー・ダンバー (Dorothy Dunbar 一九〇二-九二)、エドナ・マーフィー (Edna Murphy 一八九九-一九七四)のキャストに叫び声と太鼓の音を配し、全シーン画面を文字で繋ぎ、モンタージュ手法を採

挿図19 ハリウッドサイレント映画『獅子王ターザン』広告
(1927年)

用した。このサイレント映画は上海で上映され、最も親しみやすい大衆娯楽として人々を楽しませた。また二十世紀の新しい芸術表現という点から見れば、胡憲生が最初のモデルとなった図像と文字の組み合わせへの意識的な取り組みは、サイレント映画の流行と共に市場にアピールしようとするものであった。翻訳を魅力あるものにし、映画を見たことがある者に

もない者にも小説を読んでもらうようにするのは決して簡単なことではないのである。なお、興味深いことに、これほど古典的なサイレント映画がかつて一度は失われ、一九九〇年代になって改めて発掘された後、今ではウェブ上で誰もが気軽に鑑賞できるようになっている⁽⁸¹⁾。中国におけるサイレント映画の歴史を調べるなら、このエピソードは九十一年前に翻訳に関わった呉衡之の功績を認めるものといってもよいだろう。

さて、呉衡之の翻訳になる他の二作品が二十世紀上海の翻訳小説年表から抜け落ちているのは誠に残念と言わねばならない。それらは『野人記(ターザン)』第九編より遙かに重要であるからである。「上海小説翻訳大全(一九九〇―一九九六年)」には一九二八年に「米国ボロニーウェイ等著『宝窟生還記』(上中下巻) 短編小説集、呉衡之訳」との項があるが、これは明らかに二つの訳書を混同している。ではこの短編小説集は実際どのようなものだったのだろうか。

もともと、呉衡之が一九三一年に商務印書館から出版した『最近名家小説訳叢』(挿図20)のもとになったのは、リチャード・イトンによるアンソロジー『一九二三―二四年年鑑——欧州大陸ベスト短編小説』⁽⁸²⁾であった。明らかにこれは欧米や日本の年鑑体の一種であり、専門家や学生団体によって選ばれた毎年様々な業種からの受賞作品を編成したものである。『訳叢』はその中から十二編を選び、上下に分冊して出版した。内容は以下の通りである。

挿図20 退翁呉衡之訳・胡懷琛校訂『最近名家小説訳叢』(1931年)表紙・奥付

「落日」(スペイン) ブラスコ・イバネツ(一八六七〜一九二八)

「桃園」(トルコ) レシク・ハリッド(二八八八〜一九六五)

「灰色のロバ」レシク・ハリッド

「休日の子ども」(ドイツ) ヨーゼフ・ウインクラー(一八八一〜一九六六)

「戦地消寒記」(ルーマニア) 王妃マリア(二八七五〜一九三八)

「リブニコフ大尉のこと」(ロシア) アレクサンドル・クプリン(一八七〇

〜一九三八)

「セオドア」(スウェーデン) グスタフ・ヘルストロム(一八八二〜一九五三)

「ロシアモングルの現状」(ロシア) フセプロド・イヴァノフ(一八九五

一九六三)

「王孫末路」(ロシア) ボリス・ピルニアック(一八九四〜一九三八)

「ペリカンホテルの看板」(ベルギー) エドモンド・グレスナー

「アルカサル宮の女乞食」コンラッド・ベルコヴィチ(一八八一〜一九六一)

「金のはしごの過ち」(ラトビア) アンドレイス・ウピティス(一八七七

一九七〇)

原書の三十一編の中からこのような作品選択をするのは決して簡単ではない。作家の属性について見るだけでもヨーロッパ大陸の概念を超えている。例えばルーマニア生まれのユダヤ作家コンラッド・ベルコヴィチは後に米国籍となつているため、⁽⁸⁴⁾その国籍は表示していない。呉衡之による作品選択はこの多様性の傾向が突出しており、一九二〇年代には既に独立していたラトビアの作品も含んでいる。これは或いは訳者の呉衡之と長いつきあいのあるスツラヘルネクがラトビア出身であったことも関係しているかもしれないが、詳細は不明である。小説の内容は多様かつ豊富であり、トルコやモンゴルなどユーラシア大陸の人々の生活にまで及んでいて、これこそ「世界文学」

を十分に体現するものである。⁽⁸⁵⁾そして中国西洋双方に通じた著名な詩人であるジャナーナリストで作家でもある胡懷琛(寄塵)が校訂にあたっていることから、呉衡之が南社に加入したもう一つ別の理由が浮かんでくるように思われる。つまり呉衡之は純文学についての思考を重ねていたのである。

純文学について語るなら、短編『帰来』(The Return、挿図21)を選んだことこそ、呉衡之の眼識を示すものであった。この小説の主人公はニューヨーク

挿図21 アンダーソン著・退翁呉衡之訳『帰来』(1931年)表紙・奥付

クのとある建築事務所で働く中年の男である。妻に先立たれ、息子が夏休みのキャンプに行った家の中は空漠としている。若くして家を離れ東海岸で懸命に働いて成功したこの男は、中西部オハイオ州の小さな町へ自動車で帰ることにする。昔一緒に育った友人達に会ってみようと思つたのだ。だが道すがら目や耳に入ること、心に浮かぶことの一つ一つによって彼は気付く——自己中心的な気持ちによって、幼友達との関係が切れてしまったことに。彼は長いこと自分のことしか考えず、他人の気持ちをはほとんど気にしなかった。彼が初恋のガールフレンドにぐずぐずと曖昧な態度をとつたのもそうだった。だが経済的に成功してみても、やはり充実感を得られなかった。小さな町で顔を合わせた旧友たちも彼に心の満足を与えてはくれなかった。あるクラブで出会つた既婚の美女が家庭生活の愚痴をこぼした時、彼はこの町をすぐ離れる決心をする。伯父にくつついてニューヨークに出て行つた時と同じように、東海岸に戻ろう。もしかすると現状を変えたいと思つている同郷のあの男と会えば、変わり映えのしない生活にちよつとした喜びが得られるかもしれない。——『帰来』が直面したジレンマがここに表れている。まず、呉衡之が選んだアンダーソンのリアリズム手法は、パローズの気ままなフィクション手法とはあまりにもかけ離れていた。アンダーソンはアメリカ作家アーネスト・ヘミングウェイ（一八九九〜一九六二）とウィリアム・フォークナー（一八九七〜一九六二）に影響を与え、更に現代世界文学の様相を変えた存在であり、その含蓄の深さは通俗文学には夢想だにできぬものである。だがアメリカの芸術科学評議委員会がアンダーソンの『帰来』の見方で割れたことが、更に重要な問題を提起している。評議委員会の評価リストによれば、この小説は雑誌『センチュリー』五月号に発表され、評価順位第二位であつた。⁽⁸⁶⁾ その紛糾は作家のブランチ・ウィリアムズ (Blanche Williams、

一八七九〜一九四四) がこの年『オー・ヘンリー短編小説記念賞作品集』に寄せた序論に一斑を伺うことができる。⁽⁸⁷⁾

ただシャーウッド・アンダーソンの作品を語るとなると、批評家達はそれぞれ自分の見方を主張した。『帰来』の評議でも同様に意見が分かれた。この作品はA委員のリストでは選ばれ、B委員の好む作品リストでは最下位であつた。B委員はこの作品はアンダーソンの最高作品ではないと言ひ訳をしたが、にも拘わらず彼は他の全ての応募作品よりもこの作品のほうが含蓄があり意義深いとも感じた。これは一例に過ぎないが、評議委員達の意見が分かれたのはなぜかわかるだろう。まず、ある批評家は作品に想像力と構築性の体現を求める。別の批評家は作品にはリアリズムと結びついた暗示性が重要だと主張する。この類いの特徴が一つの物語の中に現れることは、例えあつたとしても、決してよくあることではないのだ。『ビスビー氏のプリンセス』に見える含蓄とインスピレーションについては二人の評議員の見方を統一することができても、彼らは『帰来』においては二人の評議員の見方を共有することはできなかつた。選考委員長はこの物語の中に内面世界の衝突を見た。これは実際にかなつた見方である。衝突の中には、あの単調でうんざりする昔日に帰る体験と再びそれから逃げ出した後の喜びが表現されている。少なくとも、一九二五年のベスト短編小説集がこの作品を選出したことだけは言つておきたい。⁽⁸⁸⁾

呉衡之がこの名作を選んだのは熟慮の末であつただろうと想像される。少なくとも彼は二種の年鑑アンソロジーを参考にしてはいるが、それ以外に上海

のアメリカ総領事館の友人にも相談したかもしれない。⁽⁸⁹⁾なぜならこれは誰もが好むような大衆受けする心理反応ではなく、純文学の価値を個人的観点から認めたものであったのだから。アンダーソンの文学的達成がヘミングウェイやフォークナーほどの域には達しなかったとは言え、彼ら三人は鼎立し、アメリカのリアリズム文学のうねりの中でそれぞれが主導者となり、時が流れても人々に尊敬され続けてきた。まさにこの意味において、『帰来』の翻訳は「世界文学」概念を中国へ伝えたという歴史上の大きな価値を有している。

五 体育・旅行活動の提唱者

呉衡之は国家経済と人々の生活に関わる社会の新しい動きに強い関心をもっていた。健康のために体育で中国人の体質を強化することを積極的に提唱したのもその一つである。彼が上海務商中学を主管していた時は、学校の運動会を二度開催し、社会各方面とメディアの関心を惹いた。前述のように呉衡之は上海でしきたりに縛られない活動を多数展開しており、「新安中学

挿図22 薩鎮氷肖像(モノクロ写真)

堂」の校長許際唐を学
校理事に任用し、バセ
デイ夫人を招待してモ
ンテッソーリ教育法を
紹介するなど、どれも
先見の明に富んでいた。だが一九一四年六月四日に務商中学の名による海軍の名将薩鎮

氷(一八五九―一九五二、挿図22)の歓送会で「参列者は伍秩庸、李登輝、邱道生、卓璧如、陳翊墀、陳雪佳、及び同校理事陳潤夫、潘蘭史、黄芝軒、余宝之諸君(約四十余名)、一堂に集まり、実に盛会と云うべし」⁽⁹⁰⁾とあるのはどう解釈すればよいのだろうか。実はこの集まりの真意は別にあった。呉衡之の宴席では「薩君は同校同志の厚意への謝辞を述べた後、同校の今回の運動会が優れていたのは、上海の各校が日増しに科学的に発展し、迅速に進歩し、勉学に励んでいることの証であると発言した。」これにより、数日前の務商中学による初めての運動会の際、二千人以上の来賓の中に薩鎮氷、王寵恵、李登輝らが招待され来場したことがわかる。⁽⁹¹⁾社会の名士が学校の体育教育を提唱したこと、特に伍廷芳(一八四二―一九二二、号秩庸)、王寵恵(一八八一―一九五八)、潘飛声(号蘭史)、陳翊墀など広東籍の名士が盛り上げることによって、「上海の各校が日増しに科学的に発展」するよう促した。共に広東人である呉衡之と施徳之には似た部分が多々ある。施徳之は上海精武会の活動を積極的に援助し、会長も務め、⁽⁹²⁾精武会の各地のネットワークを通して自分の「神功濟衆水」の販売を伸ばし、最後は彼自身の盛大な葬儀さえも精武会ルートを通して全国に発表した。⁽⁹³⁾

呉衡之は翻訳で「他人の嫁入り衣装を作り(他人のために努力し)」、書籍雑誌を編集し、新しい理念を広めることに長けていた。そして呉衡之は商務精神を生涯貫いた。一九二九年秋、王雲五は一度商務印書館を離れたが、気持ちは商務から離れなかった。一九三〇年春、王は商務印書館の総経理に招聘され就任する際、まず欧米やアジアの九カ国を訪問して企業管理を視察し、半年後に帰国している。ちょうどこの時期、呉衡之は『旅行月刊』(英文名 The Unison Travel Magazine 即ち「友声旅行雑誌」、友声旅行団発行、挿図23)の編集を手がけた。ただしこれは商務印書館の業務ではなかったが。彼は一

九三〇年四月号に黄賓虹の「黄山前海游记」を掲載し、付記でこう述べた。「黄賓虹先生は私の古くからの友人で、かつて涵芬楼（商務印書館の蔵書楼）の同僚でもあった。先日旅行記を求めたところ、この稿を惠贈された。先生の道徳的な文章はもとより学者に重用される所であり、本篇を読めばまさにその人となりを見ることができよう。」これは同号掲載の呉衡之自身の「中国人と西洋人の旅行概念の相違」における見解と呼応するものである。彼はまさに勃興しつつある中国の旅行業に対して自ら発言し、客観的観察を示して論評した。

今や交通は便利になり、汽車に船舶と、水陸ともに便利になったとはいえ、よほどの金持ちでなければ旅行は容易くない。だが旅行という一事も基本的な生活欲求の一つとして衣食住の次に並ぶべきものである。『易

挿図23 『旅行月刊』 第5巻第4号（1930年）表紙

経』に言う、「旅於處、得其資斧（旅してその目的地に辿り着けるかは、経済的状況と自己防衛にかかっている）」と。（訳註9）資は自分を利する金銭、斧は自分を守る武器である。昔から旅には旅費が必要であつた。思うに、我が旅行団の同志は公称三千人、若く意気盛んな者が非常に多い。遊歴の旅に出ようとの志において、どうして先賢に譲ることがあろうか。だが毎年旅行を呼びかけても、応募して実際に出かけるものは僅か十分の一しかない。その理由はどこにあるのか。敢えてこれを一言で言うならば、財力と時間の不足が妨げとなつてゐるのである。およそ私のような勤め人は他人の嫁入り衣装を作る（他人のために努力する）ばかりで、職務に追われており、例え金を準備して遊びに行き、座を盛り上げることができたとしても、結局は長時間かけて遠くまで行くことはできず、世界を博覧し造詣を深めるにはとても足りない。まさに沈杏初先生が仰る通り「旅をしても陸路は上海―杭州、上海―北京の二路線を越えず、水路は杭州湾北岸の乍浦鎮、寧波の普陀山の外には出ない（行動範囲が一定の地域に限られる）」ようでは、その得られる成績もまた僅かなものにとどまるしかあるまい。それからまた我が国の若い人々は寒酸貧苦に苦しむでもなく、平原の旅行であればそう困難でもない。そもそも富貴なる者は少なくないわけだが、しかし金持ちの子は軒下に座らず（富貴な家の子弟は危険に近寄ってはならぬ）という戒めを多く教訓として、家中に留まりあまり外に出ず、敢えて外の世界に踏み出そうとしないのだ。孟浩然の詩に「いまだ冒険に出たことがないならば、危険に近寄るなどの言も意味をなさぬ」とあるが、その意味がわかるというものだ。

ここに述べられた当時の旅行業は、都市で生活する富裕層にとつてもなお

衣食住行（衣食住及び交通）の基本需要に属するだけであり、まだ一つの独立した商業活動とはなっていない。旅行も現代的な体育運動と同じく、まだ全ての人の基本需要にはなっていないのである。晚清以来中国が世界に向けて動き出す中、呉衡之は社会を批評し、中国人も欧米人たちのように旅行によって世界の神秘を探索し、人類文明の発展に向け新しい貢献ができるよう希望した。そのために学校教育という手段を通して社会に手本を示し広めた。このような視点があつたからこそ、呉衡之は旅行雑誌の編集に参与し、人々に欧米旅行探検の伝奇を紹介する事を忘れず、「クロスコンテクスト」のパラダイムにおいて大航海時代以来の地理的な重大発見を述べて自然科学に対する中国人の好奇心をかき立てようとした。彼は同じ文章で以後の企画の概略を披露している。

C・コロンブスやアメリカ・ヴェスプッチ、バスコ・ダ・ガマ、F・ドレーク、W・ローリー、ジョン・クック、D・リビングストン、スタンレー等の欧米の探検家たちを見れば、船に乗り波を割って遠い国へ渡り、生命を鴻毛の如く軽く見た勇者もいれば、馬にむち打ち内陸奥深くに分け入って、苦心の末に虎穴に身を置いた者も、自然資源を求めて絶境に赴き、宣教のために新疆を開化した者もいる。その勇氣は何ゆえであるか。外でもない、それは観念の違いによるものである。更に進んで、最も困難な探検の挙も、五百年來、どれほどの者が行動に移したかは知らぬが、そのいずれも外国人であつた。上述の諸氏はその際だつた大物であろう。我が国政府はこの数十年間、遊歴の重要性を知らずにきた。この間、観光や商業視察、教育のため外国に人を派遣し、行ってその任務を全うしてきた者もないわけではない。しかしただ費用をもらっ

て出洋することを志し、これを出世への早道としか考えず、帰国後建白するところ何もなく、ただ欧米の物質文明を称揚する旅行記のみを報命の成績とするような輩もまた多いのである。このような遊歴は国庫金を空しく無駄遣いするものであつて、何の益があらうものか。このゆえに我が友声旅行団の宗旨は至急その頹廢の風を矯正するところにあり、ただ遊覧を提唱するにとどまるものではないのである。今後ここに上述の大探検家の事績を詳しく訳述し、分期掲載して縦覧に供し感想に資するは、また我が団の職責をいささか尽すものである。力ある者はこれを聞いて立ち上がるべし、先哲の素晴らしさに譲ることなかれ。」

予告通り、同年七月の『旅行月刊』五卷五号は呉衡之訳『欧米著名探検家列伝』を特集し、併せて呉衡之の自序も掲載した。⁽⁹⁴⁾この年呉衡之は五十九歳、黄賓虹が十一年前に使つた言葉で言うなら「曠覽九州（中国全土を広く見てきた）」旅行愛好者であつた。だが彼の具体的な足跡は、広州と上海を往來した以外は何の記録もない。これらの文章は彼が友声旅行団の名で書いたものであり、⁽⁹⁵⁾この旅行団の趣旨を陳述し、先賢に学び、現実的な意義をもつものである。

おわりに

これは始まりも終わりのない事例研究である。呉衡之がどこから来てどこへ行ったのか、依然わからぬ事も多く、さらなる研究が待たれるためであるが、とはいえ既にかなり情報が得られている。今ある材料を手掛かりにするだけでも、長期にわたり無名の存在であつた呉衡之が、実は中国と西洋の文化交流において卓越した貢献を残していたことが明らかである。中国芸術に

ついで言えば、吳衡之がその世界市場開拓にあたり橋渡しの役目を果たした功績は実に大きい。^(訳註10)彼の努力によってこそ、中国の古美術及び同時代美術が、風雨に閉ざされた闇夜のような時代に、林立する世界民族の中で自立することができたのである。商務と翻訳は、あたかも中国近現代社会の進路の礎^{いしづえ}と指針であり、一方で堅実に国家と人々の経済生活を改善し、もう一方で新しい窓を開いて民学精神を引き上げた。彼の英語教育は、方法論では、後に「中国文芸復興の父」と称される胡適の外国語学習に間接的に影響し、世界に対して現代中国の創造力を示した。また商務印書館が王雲五時代に本以外にも文具や運動具等あらゆるものを取扱うデパートのような経営で世界最大の出版機関となり、近代的小売チェーンの成功事例となった⁽⁹⁶⁾ことも吳衡之と関係している。更に重要なのは、吳衡之が翻訳を通して「世界芸術」の紹介から「世界文学」まで中国と世界を緊密に結びつけ、共に新しい未来に向かわせたことである。

註

(1) 一九二二年二月一日の南社入社書(挿図1)によれば以下の通り。「姓名・吳衡之、号・香山老柄、名・秉鈞。年齢・五十。本籍・廣東香山県。住所・広州河南洗滌西約土代巷善慶里五号。上海閘北華北里四弄底一七〇号。連絡先・現在広州河南住宅。紹介者・蔡哲夫、謝英伯、高劍父、黄樸存(賓虹)。日付・十年二月一日。」一九三二年九月三日『申報』第十四頁「東北義軍義援の昨日の状況」に「泰興吳衡之、銀貨十六元寄付」とあるのは別人であろう。一九三三年四月十二日『申報』第一頁「遼吉黒熱義勇軍後援会、寄付に感謝」に「吳衡之銀十元、上海銀行受取」とあるのは本文の扱う人物かもしれない。吳衡之の没年は不明である。上海メディアでの報道を見ると、一九三四年六月『申報』の記事「潘飛声の葬儀資金調達のため、そのコレクションを代理販売し記念券を発行」には黄賓虹と多くの広東籍の著名人が名を連ねているが、潘飛声と古いつきあいがあった吳衡之の名前が見えないため、この時点で吳は逝去していた可能性がある。一九三六年、黄賓虹は一九一九年の『中華名勝図説』序文を「吳衡之訳某女史画譜序」と題名を変えて再刊した(『學術世界』

誌、第一卷第八期、九八頁)が、これも友人吳衡之に対する追悼であった可能性がある。今後の検討を要する。

(2) 「吳権」なる人物の記事が以下に見えるが、いずれも本文で扱う人物とは関わりがない。この頃吳衡之は既に没していた可能性がある。『申報』一九三四年十月九日第一四頁、十月十六日第一〇頁、一九三五年一月十九日第一四頁、一九三五年一月二十九日第一二頁、三月六日第四頁、七月七日第七頁。

(3) 吳秉鈞という名の人物は多いが、以下の記事に見える同名人物は本文と関係がない。『申報』一九三〇年二月十八日第一四頁、『司法行政公報』一九三二年第十七、二十六期、『申報』一九三三年六月二日第九頁、十月三十一日第八頁、一九三四年九月二十五日第二頁、九月二十六日第二頁、九月二十七日第二頁、一九三五年六月二日第一〇頁、六月五日第八頁、一九四六年三月五日第六頁、十月五日第四頁、一九四七年十二月三十日第一頁、一九四九年四月十一日第五頁。また別に甘肅省靖遠にも吳秉鈞(一八九五〜一九六七、諱珽、字陶軒)がいる。

(4) 童大年(一八七四〜一九五五)が篆刻した「退藏齋」朱文方印があり、これは吳衡之のために刻したものである(真微印網の印学在線、www.seibank.netの篆刻印学專業資料庫を参照)。また浙江紹興の周肇祥(一八八〇〜一九五四)の別号が退翁であった。北京画院編『二〇世紀北京絵画史』(人民美術出版社、二〇〇八年、一〇〇〜一〇一頁)を参照。

(5) 王雲五による一九〇二年の事項の回想では「彼(吳衡之)は昼間イギリスの法律事務所まで通訳を務めているとのことだった」(王雲五『岫廬八十自述』、商務印書館(台北)、一九六七年、第三章「半工半読」、第二〇頁)。一九〇九年版『上海指南』(商務印書館)の弁護士欄によれば、この二名は「ドイツ人、上海在住歴七年。住所イギリス租界四路二六号。通訳吳衡之、文書記録吳少英。」とあり、吳衡之がこの法律事務所にて長年務めたことがわかる。一九二五年三月二十九日『申報』の「雷声布、凱密英仏弁護士事務所告示」では「本事務所は従来、公務多忙により事務員が不足していたため、ここに吳衡之、周劍秋、梁蘇身、江仁溥の諸君を招聘し、共同で事務にあたることとする。事務所住所は変わらず広東路二号。恐らく未だ周知できていないために特にお知らせする。」とある。一九二五年版『上海指南』(商務印書館)巻七雑録弁護士三十八では「雷声布 女性弁護士、広東路二号」。一九二七年一月二十六日『申報』「鄭毓秀、魏道明法律事務所告示」では「当事務所は事務が日々繁忙を極めており、目が行き届かぬのを恐れ、アメリカ租界北四川路仁智里口Y二八三号に支所を設立する。吳衡之先生をお迎えして業務に協力いただき、当事者諸君の一切の対応にあたることとする。ここに謹んでお知らせする。」

鄭毓秀（一八九一～一九五九）は広東新安の人。中国初のフランス留学で法学を学んだ女性博士であり、後の駐米中国大使魏道明（一八九九～一九七八）と共同で事務所を開設、その名は上海に鳴り響いた。魏はのちに駐米大使となった。これらことから一九二〇年代中後期の呉衡之は彼のよく知る外交関連の法律事務所での仕事に再び戻り、兼職していたことがわかる。

(6) 金広生は協隆洋行 (Fearon, Daniel & Company) の買弁であった。以下のサイトを参照。 <https://www.virtualshanghai.net/Texts/Appendix?ID=10>

(7) これは一八九九年九月二十二日『申報』広告の引用である。王雲五が学んだ一九〇二年には、呉衡之が一人だけで奮闘していた。

(8) 呉培初「旧上海外商银行買弁」の四、シテイバンクの買弁になった経緯、中国人民政治協商会議上海市委員会文史資料工作委员会編『旧上海的外商与買弁』、上海人民出版社、一九八七年、一〇九頁。呉培初は本籍蘇州、一八八七年上海生まれ、父は布商人。関連研究は以下を参照。Tang Lixing, *Merchants and Society in Modern China: From Guild to Chamber of Commerce*, Routledge, 2017.

(9) 註5『岫廬八十自述』二〇～二二頁。

(10) 時期的には一九〇五年～〇六年。『胡適自述』第三章「上海で」（一）、安徽教育出版社、二〇〇六年。

(11) 『時報』『神州日報』一九一四年九月二日の上海務商中学期始業式についての記事「最後に当校庶務主任黃惠仁君により、当校が安徽休寧の張蕙孫君、黃雨辰君、吳燦如君らにより創立されて以降、困難の中を強い情熱と意思をもって運営され、今日の盛況をもたらしたことが述べられた。」呉衡之は旧友の黃賓虹と安徽省の名士、歙県「新安中学堂」の校長許際唐（二八七四～一九四六）を学校理事とし、あわせて後者に講演を依頼した。これらは安徽人脈によって新たに始められた同校が呉の経営方式を順調に受け継ぎ、新たな経営体制で回っていくようにするためであった。

(12) 王中秀『黃賓虹年譜長編』（榮宝齋出版社（北京）より出版予定）、一九一二年七月七日の項『時報』広告より転載。

(13) 註12「上海務商中学（旧名漢英商務学校）学生募集」広告。「本校は先学期の开学以降、学生多く集まる。およそ中学相当の程度である。（中略）元よりの受験希望者は本校に郵送で申込み、入学規定を取り寄せること。要項は以下の通り。趣旨：（中略）学科：（中略）学級：四年で卒業、後半二年間は全て英語の授業とする。資格：中学あるいは中学と同等の学校に在学中の者、或いは高等小学校卒業の者は合格。予備班は国語（中国語）が流暢なら合格。年齢：十五歳以上、二十五歳以下。

学費：各学生各学期二十元、昼食付は十五元加算、寄宿生六十元。場所：アメリカ租界海寧路天保里新民坊。試験期間：八月二十一日から二十四日まで。試験科目：国語（中国語）、英語、算数。予備班は国語のみ。」

(14) 『時報』一九一四年六月五日。他にも『申報』一九一四年七月六日「上海務商中學生募集」広告：「本校は太陽曆七月三日、十三日、二十三日（即ち旧曆閏五月十一日、二十一日、六月一日）の三日間、午前八時半に入学試験を行う。本科及び予備科の試験科目は国語（中国語）、英語、数学。入学志望者は前もって申込み、保証金四元を納付の上、試験時にはペンと筆を持参のこと。規定は郵便請求あれば即送付、二分の切手を同封のこと。高等小学校卒業証書所持者は審査により入学試験免除とする。学校所在地：閘北海寧路天保里。なお、本校は七月一日から八月三十一日まで補習科を設ける。商学を学びたい者は今月三十日までに保証金二元を持参して来校の上申込みのこと。保証金は学費から控除するが期限後は受取不可、お間違えなきように。詳しくは郵送でお問合せを。『神州日報』一九一四年七月八日広告「上海務商中学期補習科開講さる、定員に余裕あり、速やかに申込を。」

(15) 番禺の潘飛声は、外国貿易を独占した広東十三行の同文行の末裔であっただけでなく、若くしてドイツに渡りベルリンの東方学院で教職につき、詩により国内外で名を馳せ、香港で『華字日報』を十三年主宰して「その雄弁なる筆にて天下を鳴らした」。一九一〇年には上海に寓居。一九一七年、潘の六十歳の誕生日に呉衡之は祝寿の対聯を作った。「遺老風姿猶綠鬢、先生佳節愛黃花。」胡君復編『古今聯語滙選』二集・慶賀一、商務印書館、一九一九年。

(16) 洪再新「中国絵画国際市場的成因——黃賓虹、呉衡之関係考」中国美術学院学报『新美術』、二〇一九年九期、第四～二〇頁。

(17) 軍部との関係は一九一四年六月四日の呉衡之と海軍名将薩鼎銘（鎮水）（一八五九～一九五二）の交際からもその一斑が見て取れるが、目的は全て商業学校の創設にあった。『時報』六月五日の記事「務商中学による薩督弁の壮行会盛大に」によれば「警務督弁である薩鼎銘（鎮水）氏はまもなく北京に向かわれる。各界代表と心ある有志は皆歓送の席を設けている。昨日閘北の務商中学も粵華樓で壮行会を開催した。酒宴の終わりに校長の呉衡之の演説があった。「薩先生は才徳兼備で、軍界学界共に深く敬慕される人物である。また商会の陳潤夫君達と共に政府に商業学校の創立を申請するという慈善活動をしてくださった。」

(18) 虞洽卿がドイツ魯麟洋行 (Reuter, Brockelmann & CO) の買弁 (コンプラードル) を次々に務め、王一亭が日清汽船の買弁であったのと同様に、庄得之はオーストリアの信義

洋行 (Mandl & Company, H.) とドイツの礼和洋行 (Carlowitz & Company) の買弁であった。

(19) 註11に同じ。

(20) 一九一六年五月二十九日『申報』「バセデイ夫人講演盛況記」を参照。同年六月の『香艷雜誌』第十二期「女界新聞」欄「バセデイ夫人の講演」にも同様の記事がある。

(21) 註20「なお同校ではバセデイ氏の講演全文を漢訳し我国の幼児教育を志す人々の要望に応える予定。」

(22) 一九三一年一月十八日『申報』「教育部、未認可私立学校の卒業生資格を否認」の記事を参照。「江蘇教育庁の上申書」によれば、前南洋公学校長の吳秉鈞は同校卒業生の卒業資格の追加認定を求めた(商科の張正賢ら十二名、民国五年七月に卒業、商業科の何培元ら二十八名と銀行科の趙雲裳ら二十八名、民国六年七月に卒業)。これに対し教育部は同庁に以下の様に指示。「上申書の件は承知したが、本部本年第八号の布告を調べたところ、追加認定の所定の方法は、本部及び前大学院が既に認可した私立学校において、認可以前に卒業した卒業生及び認可以前の在学修了生に対してのものであった。前北京教育部が既に認可した学校において本部が認める有効期間は、本年第九号布告において明白に規定している。当該校(南洋商業公学)は民国八年に既に活動停止しており、また前北京教育部の審査と認可を経ていないことから、自ずと追加認定を行う余地はない。救済方法については、本年八月、本部は上海市内の未認可及び閉校済の私立専科以上の学校の卒業生・修了生に対して選抜試験を実施している。同選別試験要項第七条に「卒業生のうち成績が比較的優良なる者は、公立学校或いは既に認可された私立専科以上の学校の入学試験において、その最終学年に転入することを認める(これは選別試験の結果によるものであり、教育部の命令により公立及び認可済みの私立専科以上の学校は事情を斟酌し融通するものとし、大学規定第四条及び専科学校規定第四条の制限を受けずに行うことができる)。その他の卒業生及び修了生はその学力レベルにより相当する学年次に転入することとする」とある。将来必要時において本部は或いは当該試験を再実施するかもしれない、それぞれの学生はもとの学歴が上記の選別試験規定第一条に合致するならば、その時に間違いなく試験を受けることにより、救済されることのできる」云々。」

(23) 黄賓虹による題辞、『中華名勝図説』一九一九年。

(24) *Chinese Pictorial Art: E. A. Szeheek Collection, Shanghai: The Commercial Press Limited, 1914. 『字林西報』(The North China Daily News) 一九一四年七月二十七日第十三版*

「書評」によれば、「周知のように、十二ヶ月前、スツラヘルネク氏はその全てのコレクションを条件付きでスウェーデン人コレクターのファーレウス氏に譲渡した。」ファーレウスの曾孫であるピセ・エヴァーズ (Bisse Evers) 女史の二〇〇二年十月二十二日と十一月十三日の筆者宛書簡によれば、同女史の母方の曾祖父は一九二一年に極地探検家トールルド・ウルフ (Torild Wulff) 一八七七〜一九一七) と共に中国に来訪し、一九一三年にスツラヘルネクのコレクションを購入したという。

(25) スツラヘルネク古美術店 (Szeheek's Gallery of Antique Chinese Art) の名刺 (挿図6) に記された経営内容は絵画、玉器、刺繍、銅器、彫刻、磁器である。この名刺はジェームズ・ケーヒル (James Cahill) 一九二六〜二〇一四) とトーマス・エブリー (Thomas Evey) からそれぞれ頂いたものであり、ここに記して深謝する。一九三〇年の英文の旅行ガイドブック (*Tourist's guide to Shanghai-North China, Hong Kong & Shanghai Hotels, Ltd. 1930 edition*) 第一四頁にスツラヘルネク古美術店 (江西路二十六号) の広告が掲載されており、英文で「最も早く創業した中国古美術店。收藏家の皆様の求めに応じ、最上級の中国絵画を取扱います」の宣伝文句がある。徐珂『清稗類鈔』(商務印書館、一九一七年) 鑑賞類四「英国人スツラヘルネク蔵古陶磁」の項には、スツラヘルネクは「金石書画のほか、古陶磁の蒐集甚だ多く、唐の越州窯の茶比、宋の定窯碗、定窯の劃花盞、元の定窯盞。明の仿宋定窯瓶、仿明建窯觀音、建窯三彩觀音、建窯香炉、建窯獅子、建窯蓮花式碗、建窯芭蕉尊。国朝(清)の康熙仿宋定窯鼎、康熙仿宋定窯尊、康熙仿宋定美人尊、康熙仿明建五彩瓶、康熙粉定大碗、雍正仿宋定窯瓶、乾隆仿宋土定窯瓶、乾隆仿明土定窯瓶、乾隆磁鼻烟壺など。宣統辛亥冬、かつてその所蔵するところを以て人に示せり。」陶磁に対する呉衡之の関心を示す報道はまだ見つからないが、呉は黄賓虹との交際を通じて器物類に関しても十分に理解していたはずである。そうでなければ関連する翻訳はできなかったであろう。

(26) 王中秀編『黄賓虹文集全編』(荣宝齋出版社、北京、二〇一九年) に収録された以下の文章を参照。黄賓虹による一九一三年スツラヘルネク『中華名画』の序文、青銅器、陶磁器及び玉器の各編に付した解説。また一九一九年、一九二六年に『中華名画』を紹介した「古画出洋」「滬浜古玩(上海骨董)市場記」。

(27) 十二月二十三日『神州日報』「西洋紳士收藏の中国名画の展覧会」。この文章の記者は黄賓虹である。なぜなら十二月二十一日『神州日報』「氷饌雜録」で「西洋人スツラヘルネク君」を紹介し、『中華名画』収録作品の概略を説明しているからである。記者は「来年西曆一月九日から十一日まで、従前の会場にて中国名画大展覽会を開催」と予告している。『字林西報』は一九一四年一月十日に前日九日の展示

をフォローする記事を掲載。「中国芸術展：ジェッセルコレクション」。この時は王立アジア協会で展示され、ヒンクリー (F. E. Hinkley) 博士の挨拶があり、上海は美術作品コレクションが一堂に会する場所として素晴らしいと述べたとある。だがこの件については中国語の新聞記事は未確認である。

(28) これはスツラヘルネクが一九一四年四月に記した『中華名画』の「自序」ではなく「弁言 (Introduction)」である。

(29) 洪再新「古画交易中の芸術理想——吳昌碩、黄賓虹与『中華名画』史德匿藏品複印件』始末」、盧輔聖編『海派絵画研究文集』、上海書画出版社、二〇〇一年、五九七—六三五頁。

(30) 註25に同じ。徐珂『清稗類鈔』の「英国人スツラヘルネク蔵古陶磁」の項目は明らかに『中華名画』の黄賓虹の序文「深明画理、貫徹禪宗（絵画に深く通じ、仏教に精通する）」から引用したものである。

(31) 註23に同じ。

(32) 筆者論文。Zaixin Hong, "An Entrepreneur in an Adventurer's Paradise: Star Talbot and His Innovative Contributions to the Art Business of Modern Shanghai." in *Looking Modern: East Asian Visual Culture from the Treaty Ports to World War II*. Edited by Jennifer Purle and Hans Thomsen. Chicago: University of Chicago Art Media Resources, 2009, pp.85-105.

(33) 『時報』三月十四日。

(34) 見学者は唐少川、甘翰丞、勞敬修、張聿光、黄樸存（賓虹）、李仲干、徐仲可、楊雪瓊、雪珍及び西洋人スツラヘルネク等であった。

(35) 一九一二年六月四日『時報』「中国古画展覧会」広告を参照。「本院は当地上海在住ドイツ人収蔵家マンハイト弁護士の御厚意により、中国古画数百点を借用いたします。均しく清内府あるいは大収蔵家の蒐集になる秘宝、驚異の品々、お目にかかれぬ逸品揃い。太陽曆六月七、八、九日（即ち旧曆四月二十二、三、四日）の三日間、午後二時より七時まで当院にて陳列し、内外の紳士淑女にご覧頂くもの。上海の上流の奥様方には目利きの大家少なからず、是非とも当日博物院本院にお運び下さいませ。入場券はお一人様一元、皆様のおいでを心よりお待ちしております。上海博物院謹白。」黄賓虹は一九四三年十二月十四日に傳雷にあてた書簡の中で以下のように記した。「二十年前、愚公（宣哲）に黄浦灘のとあるクラブに呼ばれたことあり。入場券は一枚二、三十元、全てヨーロッパ人の個人コレクションなり。」ここでの「二十年前」は「三十年前」の記憶違いであろう。二、三十元の入場券もまた大袈裟な誇張と思われる。

(36) 註1に同じ。また「南社構成員名簿」（柳亜子『南社紀略』より採録。付したア

ラビア数字は入社書類の記入順を示す）による。

(37) 註36に同じ。

(38) 胡懷琛「南社始末」、『越風』、一九三五年第一卷第一期。

(39) 李若晴より筆者宛の書簡、二〇一九年八月二十日。関連研究として、李若晴「国画研究会と演系将領的筆墨因縁——以蔡守、李根源与趙藩为中心」、同著『越台春望——区域競争中的広東美術（十六—二十世紀）』第七章、人民美術出版社、二〇二〇年、第一九九—二一五頁。

(40) 高剣父は半年後、学生運動のため意気喪失して引退した。李若青「驚変…一九二一年甲工学潮中的高剣父与陳炯明」、同著『越台春望』第八章、第二一六—二五六頁。

(41) 『黄賓虹年譜長編』同年三月の項を参照。王中秀によれば「もとの書簡には年月の記載がない。鄭鴻年（洪年）と梅光培が広東財政庁の事務を引き継いだのはこの年二月であり、黄賓虹が吳衡之と面談したのは三月十二日である、ゆえに高剣父の書簡は四月二十六日の返信と考えられる。書簡は明らかに吳衡之の広州における商業活動に触れているが、具体的事情は不明である」という。ただし書簡の日付を四月と断定する材料があるわけではないため、総合的に考えると、三月二十六日と判断するのが適当であろう。なお浙江美術館編『神州国光——黄賓虹精品集 附編文献』（浙江古籍出版社、二〇〇九年）には「高剣父書（二）／封書」とあるが、封書と「高剣父書（二）」の内容が合わないため「高剣父書／封書」とすべきである。筆者は「広東現代画壇三題——黄賓虹与張虹交往新考」（『美術学報』二〇一九年第二期）の六七頁挿図一五において、調査が至らず従来の誤りを踏襲した。ここに訂正する。

(42) 李若晴による筆者宛の書簡、二〇一九年八月二十日。李はの中で沈仲強「大元帥府時期处理「官産」的点滴回忆」（『広州文史資料存稿選編』第八集、中国文史出版社、二〇〇八年、一六二—一六四頁）を示した。また李の提供による一九二三年十月八日広東全省官産清算所所長梅光培の署名のある公文書は、吳衡之がなぜ梅に協力を求めたかを説明するものである。梅光培（一八八三—一九四〇）はアメリカに留学し、後には富裕な華僑商人として成功した人物である。一九一〇年に梅喬林らと同盟会シカゴ支部を組織し、主要責任者の一人となった。武昌蜂起の成功後、臨時大總統府重要機密秘書となり、後に大元帥府資金調達部総裁を任せられた。梅光培は生前、全国禁煙（阿片取締）所長、広東造幣廠廠長、財政庁長、官産清算所長、戦時民政庁特務科長を歴任している。李の指摘によれば「この書簡によって一九二四年に高剣父が孫と陳の間で態度を決めかねていたことと、政治から完全には切れていなかったことがわかる。高自身も各種の人脈を通じて不動産に投資し賃料

収入によって生計を立てていたの、売画や弟子への教育によって生活していたのではない。高は何の官職も得ていなかったが、日々の生活は十分に快適であった。」(43) 一九一九年双十節(十月十日)発刊の『時報』美術週刊。この文章はスツラヘルネクのコレクションがスウェーデンのコレクターに譲渡されたいきさつに關して、従来の説と食い違う記述を見せる。もしもそれが呉衡之の把握していた内幕であったとすれば、この「古画出洋」のエピソードはより史実に近い可能性がある。

(44) この時スツラヘルネクは京都に行っていた。布衣書局のオークションサイト「拍好書」に出品された『中華名画』(www.pahoshu.com/detail/4267.html)は、一九一九年九月二十二日にスツラヘルネクが京都で其日庵なる人物に宛て贈呈した英文及び和文の署名本である。受領者は近藤廉平(一八四八〜一九二二、号其日庵、日本郵船会社第三代社長、貴族院男爵議員)、あるいは杉山茂丸(一八六四〜一九三五、戲号其日庵、政治運動家、実業家、夢野久作の父)である可能性がある。受領者の検討にあたっては後藤亮子が協力した。

(45) 洪再新「時人画、古画的現代市場：買収收藏家劉松甫事跡考略」、『芸術史研究』第十一輯、中山大学出版社、二〇一〇年、四八三〜五一頁。

(46) *Chinese Paintings by Madame Wu Hsing-fen The most distinguished painteress of modern China*, edited by Chen Kuo-Chuan, Shanghai, August 15, 1915.

(47) 陳国権は明らかに『中華名画』掲載作品の真偽について十分に理解していた。贋作制作の一般的状況について述べた後、陳は『中華名画』の真偽について、直接間接に論じている。一面では陳は隱喻的な表現を用い、スツラヘルネクが中国古画についての国際市場の無知を利用し、大量の贋作で世を欺いたことを批評した。別の面では、彼は『中華名画』については一言も触れず、ただイギリスの中国学者ハーバート・ジャイルズ(Herbert Giles、一八四五〜一九三五)の*An Introduction to the History of Chinese Pictorial Art*とドイツ系アメリカ人中国学者フリードリヒ・ヒルト(Friedrich Hirth、一八四五〜一九二七)の*Scraps from a Collector's Note Book*だけを認め、中国人の眼から見て、彼らの著述は一分の隙もなく正確で信頼できると述べた。

(48) 「我が中国の古画は早くから欧米の人々に尊重され、巨額で買求められてきた。名品が手に入るものなら宝物を得たとばかり著書を出版してそのいわれを説明し、作品写真を撮影してこれを広め、同好の士に公開する。その珍藏するものは極めて豊富、唐宋の名画、古代の青緑山水から元四大家まで、数多を網羅し広く蒐集、当代名手の作もまた探し求めて蓄える。実に多彩で無いものはない。これによって知れるのは外国人による我が国の古画嗜好の深さであるが、もしその変化の

要訣を示し精密なる奥義を翻訳する者がいなければ、外国人はまたどうしてこれを研究できようものか。呉杏芬女史は、もとより丹青をよくし、外国人に重んじられるところとなり、この十八名勝図冊は諸名家の筆法を臨模し、極めて得がたい。(中略)私は呉衡之先生と二十余年の交わりを経て、先生を最も深く知るものである。ここに数語を記しその一端を述べた。民国八年十一月、上虞許家惺黙齋、北上海の二悲室寓廬にて記す。」

(49) 原文 He is already known in the world of art by his assistance in the compilation of Mr. E. A. Strelnick's *Chinese Pictorial Art*, Shanghai, 1919.

(50) 同書表紙に箔押しされた英文によれば、カタログ中の絵画作品は唐熊の所有であり、その住所は上海フランス租界自来火行東街(現在の永寿路)一三六号である。このため陳の序文は以下のように強調した。「このカタログにおいては、作品は存命の画家により制作され、またその子息により所有されているため、そのような(真偽鑑定)の困難と不合理は完全に除去されている。一般的に、ある画家は風景、花、宗教的人物、木、鳥等々の特定の一つの主題に特化する事が多い。だがこのコレクションではこれら全ての画題が様々な古典を学んだ一人の画家によって制作されている。これにより本書はユニークなコレクションとなっている。」(原文英語)

(51) 「絵画に關する中国の記載によれば最初の画家は女性であったにも拘らず、中国の歴史において女性画家は奇異なものとされ、男性画家よりも遙かに少ない。このために、絵を描ける中国女性はいより尊重され、その作品は鑑賞されてきた。

現代中国で最も優れた女性画家である呉杏芬夫人によって制作されたこのコレクションは四十一一点の作品で構成され、特別な価値を有する。これは過去出版されたいかなる画冊とも異なっている。本冊の特徴は以下の数行でまとめることができよう。(中略)本書における作品は半世紀間もの美術を学んできた女性によるものである(後略)。(原文英語)

(52) このことから想起されるのは、広東商人施徳之の耀華写真館が率先して女性撮影者を採用し女性顧客を呼び集めたエピソードである。いずれも顧客目線からの発想であった。註32、八九頁を参照。『世界繁華報』一九〇五年四月八日李伯元「女性写真」より引用。

(53) 註20参照。「この日、男女の来場者により満席となった。まず同校の教員で西洋学者の何興華君が演説した。モンテッソーリ教育法は感覚を捉え子どもを啓発し、その効果は早く現れる。自由に自然についての知識を身につけ、子ども自身の天性によって発見していく。いわゆるオート教育法というのはこれである。家庭の責任者たる者、大いに歓迎すべきであろう。教育熱心で面倒を厭わないパセディ夫人

に、会の人間を代表して感謝の意を表する」と。

- (54) これは陳国権の「中国文芸復興觀」(『中国近世女界大画家吳杏芬画』序文)とも符合する。吳衡之は『中華名勝圖說』序文で以下のように述べた。「更に、現今中国の女性芸術家は非常に少ないため、彼女たちを激励し、またこの重要なテーマに取り組むよう人々を促すために、本書は英語と中国語の二つの言語で出版されてきた。一国の将来はその理想の実現にかかっており、それはまた真なる芸術家が最高にして最良の理想を魅力的な形で生み出し、それによって人々が行動するよう啓発し、人々を現状より改善すべく引き上げることができるとかかっている。現時点の中国は突然の変化を経験しており、それゆえにこそ真なる芸術家の義務は大きい。中国における文芸復興の実現は、中国の思想文学芸術に精通した芸術家にかかっている。中国芸術は常に倫理的な教えを課し、人格的理想を示してきた。そしてこの目的は新しい芸術流派においても保たなければならない。」(原文英語)
- (55) 「我々は卓越した芸術に敬意を表し、また中国人学者であるH. C. Wolfe(吳衡之)氏に感謝の意を表したい。この作品群は同氏の尽力によって人々に知られることになったのである。」(原文英語)
- (56) 同書英文によるNote。
- (57) 「壬戌仲春 吳佩孚 洛陽軍官署にて記す」
- (58) 上海総領事カニングハムの在任期間(一九一八年十月〜二〇年九月、二一年三月〜二六年十一月、三二年四月〜三五年十二月の三回)から、吳衡之とカニングハムの交際の時期を推測することができる。なお吳衡之はカニングハム(一般的中国語表記:克寧翰、字義は peace maker)の中国語名を「克銀漢(字義は money maker)」と訳した。翻訳者として商業への愛着を強調し、カニングハムの職務が確実に果たされるようにしたものである。
- (59) 吳杏芬の作品は多くの国際博覧会に出品された。これは中国現代絵画が世界に向かう一つの新形式であった。
- (60) チャピンは早くも一九二二年に学術誌『アート・ブレイク』に日本の根付を論じる文章を発表し(『Themes of the Japanese Netsuke Carver', *The Art Bulletin*, Vol. 5, No. 1 (1922), pp. 1021)、『一九四〇年に米国カリフォルニア大学バークレー校で王朝の護符としての宝剣の研究により博士の学位を取得した』(『*Toward the study of the sword as dynamic talisman: the Feng-ch'eng pair and the sword of Han Kao Tsu*, Ph. D. Thesis/ dissertation in Department of Oriental Languages and Literatures, University of California, Berkeley, 1940)』。チャピンは仏教絵画研究において優れた業績を残しており、特に大理国の張勝温による梵画像長巻の研究で知られている(『A long roll of Buddhist

images', Revised by Alexander C. Soper. Foreword and excuses on the text of the Nan Chao ti-chuan by Alexander C. Soper. *Artibus Asiae*, 1972, p. 142)。

- (61) 「吳杏芬夫人による山水画は本書で再制作されたもので、中国古代絵画の伝統的様式に合致している。その作品は作家精神においてもまた格調高い詩文においても過去の連続性をもつものでありながら、同時に生き生きと生命力をもって描かれている。ごつごつした山やそびえる松、瀑布や繊細な竹叢など、中国山水画の美しい要素が名高い物語の景を見る者のためにそこにある。そして描かれた景には、優れた中国人学者である吳衡之氏によって中国語と英語の説明文が添えられている。吳氏はまたそれぞれの作品の様式とその様式の創始者の簡潔な伝記的説明も付している。」(原文英語)
- (62) 胡適は一九二二年七月二十三日の日記(『胡適日記全集』、聯経出版公司、台北、二〇一八年)において王雲五を高く評価している。「王氏は昔私に英語を教えてくれた。氏は完全に独学によって成功した人物であり、その読書量は最も多く最も博識である。自宅に所蔵する西洋の本は一万二千冊、中国語の本も少なくない。氏は道徳も極めて高く、(中略)その学問道徳は今日において比類ないといふべきである。氏は今年三十四歳で、毎日必ず百頁、外国語の本を読むという。」
- (63) 王中秀が抄写した『商務印書館編訳所職員名録』のコピー(原本は一九〇五年から一九三〇年の間に在職した全人分の人事記録)によれば、商務印書館が同社入社後に各人に対して作成した人事記録は、社員本人が記入したものではない。「五七六 吳秉鈞、号衡之、年齢五十一歳。広東省香山県籍。到着年月日: 十一年一月三日。紹介者: 王岫廬(雲五)。給与額: 一百元。住所: 閩北華興里四弄一七〇号。記事: 惜余中西学校、南洋商業公学校長を二十八年間歴任、また『華英合文報』主筆を務める。』『華英合文報』については不詳。王中秀はこれについて王雲五が恩師を人所させるために偽装したものではないかとの説をとるが、その当否はいまだ不明である。
- (64) 王中秀の二〇〇九年八月十八日付筆者宛書簡によれば、これは黄賓虹の子息の配偶者、羅時敏(一九〇七〜二〇一八)の言葉である。羅は『商務印書館編訳所職員名録』の最後に記載された職員であった。
- (65) 註63に同じ。また『商務印書館総公司同人録』(一九二三年一月)によれば、雑纂部: 何公敢、黄幼希、江練百、沈淑清、戴俊甫、吳衡之、俞鞠之、朱時隼、唐旦初、程選公、林滬生、高晴川、童卓漢、錢漱六、孟紫瑚、孫衛瞻、高九香、夏粹若、何崇齡。『涵芬楼書話』——孔夫子旧书网 www.kongfz.com/blog/blog.php?do=showone&id=2674——二〇一三年一月二十日訪問。(二〇一〇年現在確認不

可)

- (66) 俞劍華(一八九五～一九七九)は一九四八年一月に『美術年鑑』序文において回顧した。「欧米諸国や日本ではよくこの種の美術年鑑の出版があるが、中国ではまだ見られぬようだ、否、まるで聞いたこともない。民国十八、九年(一九二九、三〇)頃か、老友黃賓虹氏が神州国光社を引き継ぎ、『美術年鑑』の編集出版を提議したことがあった。私も無償で編集計画に参与したのだが、編集が困難だったのと、神州国光社もそのうち変質し黃氏が同社を離れてしまったため、美術年鑑の出版計画は束の間のあだ花さへ咲かすことなく、影も形もなく消えてしまった。」王辰昌主編『美術年鑑』、一九四八年本の翻刻、上海社会科学院出版社、二〇〇八年、一三～一四頁。
- (67) 編集者の顔ぶれは、文元模、李希賢、吳衡之、周昌寿、林癸、胡嘉詔、程選公、鄭貞文、謝六逸、戴鴻儒、羅鼎、顧寿白。
- (68) 張明華『中国字典詞典史話』(商務印書館、一九九八年)第六章「近現代字典詞典の変遷和革新」を参照。
- (69) 退翁吳衡之訳述、胡寄塵懷琛校訂『最近名家小説訳叢』上下冊、商務印書館、小説世界叢刊、一九三一年。訳本の奥付によれば、英文での説明は以下の通り。The story World Series. Translations From the Best Contemporary Short Stories. Translated by Tui Weng. Edited by Hu Huai Chen. Published by Y. W. Wong. 1st ed., May, 1931. 原書は *The best continental short stories of 1923-1924: and the yearbook of the continental short story*. Edited by Richard Eaton, Boston: Small, Maynard, 1924. 452 pages. この訳本は『中国現代文学総書目 翻訳文学巻』(賈植芳編、知識産権出版社、二〇一〇年)には記載されていない。この総書目は一九一七年から一九四九年までに中国で翻訳出版された外国文学作品を詩歌・散文・小説・戯曲の四種に分けて収録したものである。
- (70) 安德森著、退翁吳衡之訳述『帰来』、商務印書館、小説世界叢刊一、一九三一年。原書は *O. Henry Memorial Award Prize Stories of 1925*, Chosen by the Society of Arts and Sciences, Garden City, NY: Doubleday, Page & Company, 1926; *The Best short stories of 1925: and the Yearbook of the American short story*, edited by Edward J. O'Brien, Boston: Small, Maynard & Co., 1926. 当資料は筆者が所属するビュージェットサウンド大学図書館の副館長 Lori Ricigliano 女史の御教示による。ここに記して感謝の意を表す。
- (71) *Tarzan and the Golden Lion*, New York: Grosset & Dunlap, 1923. 333 pages. これは最初に出版されたハードカバーで、J. Allen St. John (一八七二～一九五七)による八枚の挿画を収める。同年のうちに他社からもペーパーバックが出た。*Tarzan and the*

Golden Lion, Chicago: A.C. McClurg & Co., 1923. 以下の電子版も参照:

<http://gutenberg.net.au/ebooks01/0100271h.html>

- (72) 一九二八年六月十六日『申報』第七頁の商務印書館広告には、三冊、二六二頁、定価七角とある。
- (73) 「陳黙齋と吳衡之、招飲し賦を贈る」として『胡懷琛詩歌叢稿』(商務印書館、一九二六)に収録。また「陳黙齋と吳衡之に再示す」の詩もある。「独搔短鬢問蒼天／亂世能狂已算賢。双十韶華真艷艷／重陽風雨自年年。琴椰聊与抒孤憤／蔬果無妨証夙緣。疏散我慚詩筆拙／墨痕黯淡不能鮮。」
- (74) 胡憲生の他にも一九四六年に上海百新書店は章鐸声(一九一〇～一九八四)訳の『人猿泰山(ターザン)』シリーズ第一集の第四回『泰山之子(ターザンの子)』を出版した。奥付にある同シリーズ第一集の目次は以下の通り。「人猿泰山(ターザン)」「泰山情侶(ターザンの恋人)」「泰山伏虎(ターザン虎を倒す)」「泰山之子(ターザンの子)」「泰山得宝(ターザンの宝探し)」「獸王泰山(獸の王ターザン)」「泰山蒙難(ターザン受難)」「泰山出險(ターザン危機一髪)」「泰山調獅(ライオンを従えるターザン)」「泰山漫画小人国(小人の国のターザン)」。
- (75) 香港の『泰山野人記(ターザン)』は一九六一年に泰山書局より八編出版された。各編のタイトルは一九三八年の商務印書館『野人記(ターザン)』十編の始めの八編と全く同じである。台湾では、翻訳偵探事務所のプロゲ「ターザンの来歴の謎——啓明書局の泰山伏虎」(http://lysharon.blogspot.com/2013/04/blog-post_8585.html)とフェイスブック記事「野人記から泰山故事へ」(<https://www.facebook.com/FanYizhenTanshiWuSuo/posts/1005630779527152/>)がターザンシリーズの中国語訳版本に関する情報を紹介している。
- (76) 「故事中国網」二〇一八年六月二十七日の記事によれば、中国大陸では初のシリーズ完訳挿画本となる「人猿泰山(ターザン)」全二十五編が上海文芸出版社と上海故事会文化メディア有限公司の編集により出版される運びという。
http://www.storychina.cn/fmOnlineStory_Detail.aspx?ID=2734
- (77) 胡憲生は『新学制初級中学教科書：英文法』(商務印書館、一九二六年)を編集。これを一九二三年に胡とH. L. Hargroveが共同編集した『新学制初級中学：英文文法合編』(王雲五序文、商務印書館。PDF版は<http://www.bookinlife.net/book-293503-viewpic.html>)と比較すると、中国の英文教育の進展が見てとれる。これらはいずれも白話の普及に役立った。
- (78) 張中良『五四文学：新与旧』秀威資訊科技出版、台北、二〇一〇年、二〇九頁。陳慶『從帝国叙事到「美猴王」奇觀——論「人猿泰山」的早期中訳本「野人記」』、『文

学評論』二〇一八年五期、六七～七四頁。

- (79) 『野人記(ターザン)』各編の物語は、各回に内容概略風のタイトルをつける中国文学の章回体の形式で中国語訳するのに適していた。例えば李毓芬訳『獸王豪傑録』(邦題ターザンの密林物語) 第一回「醋海風波幾成巨敵 情場潦倒頓悟前因」、張碧梧訳『重圓記』(恐怖王ターザン) 第一回「茹苦含辛天涯覓妻子 出生入死林畔救奇人」、張桐館訳『倭城歴險記』(ターザンと蟻人間) 第九回「忽小忽大聞言驚妙策 是虚是実刺臂探真情」等、それぞれ対句形式で字数を揃えているのがそれである。

- (80) 中国国家数字図書館—民国圖書—『宝窟生還記』

<http://mylib.nlc.cn/web/guest/search/mingunorushu/medaDataDisplay?metaData.id=4957837&metaData.Id=23920388&idLib=40283415347cd8bd0134834ecf150010>

- (81) <http://www.ebazine.com/mag5/0591.html>

- (82) <https://www.douban.com/group/topic/42878702/>

- (83) 註69参照。全三十二編のタイトルは以下の通り。

The fate of the Baron Von Leisenbohg / Arthur Schnitzler

At the sign of the pelican / Edmond Glessner

Is he coming? / Ivan Vazoff

The imprint / Karel Capck

The maiden / Johannes V. Jensen

The smuggler / Aino Kallas

The death of the old deenster / Lauri Pohjampaa

The holiday child / Joseph Winckler

For a new resurrection / N. G. Kathorne

Caliban / Heendrick Vandemere

A painter in the village / Geza Gardony

Getting acquainted / Geza Gardony

The illusion / Virgilio Brocchi

The red notebook / Luigi Pirandello

Vassiza / Monchilo Miloshievitch

The golden staircase / Andrejs Uptits

The pink ass / Janis Ejerins

Death / J. Akuraters

Uncle Ferdinand / Kristian Elster

The forgotten ghost / Kornel Makuszyński

The treasure of Almeida / A. d' Aguliar

In the winter of war / Her Majesty, Marie, Queen of Rumania

The violoncello / J. A. Brascos-Voinesti

The child / Vsevolod Ivanoff

Captain Rybnikoff / Alexandre Kuprine

Biolokskoje / Boris Pilniak

Sunset / V. Blasco Ibanez

Theodore / Gustav (Gustaf) Hellström

The peach garden / Resik Halid

The grey donkey / Resik Halid

The Beggar of Alcazar / Konrad Bercovici

- (84) 一九四七年、ヘルコヴィチはチャーリー・チャップリン(Charlie Chaplin) 一八九〇(一九七七)と映画『独裁者』の脚本の著作権をめぐって裁判し勝訴した。Chaplin, *My Autobiography*, New York: Simon & Schuster, 1964.

- (85) 編者ノートによる翌年(一九二四年七月～二五年七月)のマンソロジー。序言「短編小説を出版する雑誌社の住所、重要な短編小説作家の略伝、この年のヨーロッパ大陸の短編小説の索引を付し、」(こ)でも「世界文学」の理念を体现している。

- (86) 前註、一六頁。

- (87) 前註、一二～一三頁。

- (88) 註70参照。

- (89) 註58、60参照。

- (90) 『時報』一九二四年六月五日、「務商中学祖饒薩督弁志盛(務商中学による薩督弁の壮行会盛大に)」。

- (91) 『時報』一九二四年六月一日「務商中学第一回運動会志」。

- (92) 『時報』一九一四年十一月十一日の記事「精武体操会卒業式」と同月十四日の運動会についての十三日の予告記事「務商中学第二回運動会」から、武術を愛好する広東人の気風を見て取ることができよう。ただ「精武」の語は身体鍛錬を広く指すこともあり、必ずしも「精武会」と直接の関連があるとは言えない。指摘しておく必要があるのは一九三四年六月の申報の記事「潘飛声葬儀費用調達のためのコレクシオン代理売却記念券発行」に施徳之の名が出る一方、名声ある呉衡之の名が見られないことで、おそらくこの時点で呉は逝去していたと思われる。註1を参照。

- (93) 註32を参照。

- (94) 同号には黄賓虹「桂游日記」(未完)が発表され、呉衡之と老友黄賓虹の関係が

依然良好なことを示している。

Number 10, June 2014.

- (95) 吳衡之『歐米著名探検家列伝』序文「友声旅行団月刊発行、その撰述は余に属す。民国一九年六月一日中山呉退翁滬北退蔵廬にて謹んで記す。」文の後に呉杏芬夫人が黄海松風図に古律詩を題し、付記して「図は拙作『中華名勝図説』に見ゆ。画法は蒼古で黄鶴山樵の筆致あり。」また「虞山にて言子の墓を謁し、虞山を下り尚湖に至りて三峰を回望す（詩は省略）。本詩二章は老友潘蘭史徵君が虞山に遊んだ旧作であり、続けて著録した。虞山の精彩を一層引き立ててくれるだろう。」関連資料については友声旅行団編『友声旅行団簡史』（友声旅行団、一九四七年）を参照。

- (96) 趙元任『従家郷到美国——趙元任早年回憶』（学林出版社、一九九七）最終章「閑話常州」、商務印書館経営モデルについての論説を参照。

<http://www.shuku.net:8082/novels/oveseal/jiaxiangng/jiaxiangng03-08.html>（二〇一九年八月一日訪問）。

訳者註

- (1) 「クロスコンテキスト」は本論文のキーワードであり、中国語原語は「跨語境」。英語では cross-context で、共に筆者洪再新の重要なキーワードである。十年以上の議論の蓄積により、「跨語境」は中国語世界ではよく見かける術語となりつつあるが、日本語への翻訳はおそらく初出になると思われる。「クロスコンテキスト」とは、ある言葉が異なる文脈（コンテキスト）の中に置かれた場合に発生する意味を捉まえる概念である。我々は事物・事象を捉えるとき文脈化を行うが、それは往々にして単一のコンテキストに過ぎない。我々を取り巻く現実はより複雑であり、その複雑性を捉えるために、我々は異なるコンテキストにおいてクロスチェックを行う必要がある。例えば、政治的には保守派であった羅振玉が人文科学においては最新の学識を備えていたというパラドックスを扱うには、「クロスコンテキスト」のパラダイムが有効である。原語の「跨」の字義がクロスオーバーであることは漢字文化を共有する日本の読者にも理解されやすいが、「語境」の語感では日本語では伝わりにくい。むしろ英語の cross-context という概念の方が理解に繋がると考え、ここでは「クロスコンテキスト」とした。ただし英語での議論では独立した名詞としてでなく、形容詞的に cross-contextual approach / perspective / paradigm などの形で使われる概念である。適切な訳語については今後の議論を待ちたい。

同概念の更なる理解のためには筆者による以下の文章を参照されたい。
Hong Zaixin 'James Cahill and the Study of Chinese Painting', *Journal of Art Historiography*,

- (2) 原文「別文氏」ここでは別発印書館即ちケリー・ウォルシュ商会 (Kelly & Walsh Ltd.) を指す。同商会は一八七六年に設立された洋書出版社で、上海を中心に、香港や横浜、シンガポールにも拠点を置き、多方面にわたる欧文（主に英文）書籍を出版した。著者の教示によれば呉衡之は同社との関係が深く、後述の『中華名画』の世界各地への流通も同社が担当したという。

- (3) 原文では重商主義であるが、近世ヨーロッパの経済政策を指すのではないため、誤解を避けるために「文化的重商主義」と訳した。筆者の議論の大前提として、商業が中国社会の中で卑しいもの汚いものとして蔑まれてきた歴史的文脈がある。当時の中国の儒教的世界観においては、商人は士農工商の最下位にあるものとして蔑視され、商人に対する眼差しは日本以上に厳しく冷たかった。このような中で呉衡之の行動原理が商業に重きを置いたものであったことを指して、筆者はこの用語を意識的に用いている。

- (4) ラトビア国籍の Strehneck (中国語表記：史德匿) の日本語表記については、一九二九年の東京美術倶楽部の「スツラヘルネク氏所蔵品展覧」目録に基づきスツラヘルネクとするが、当論考註44に示された一九一九年の英語自署のある資料には日本語で「スツライネーク」と墨書（おそらく自署）されている。

- なお、スツラヘルネクのコレクションについては同著者による以下の先行研究を参照されたい。洪再新著、塩谷純訳「ストックホルムから東京へ——二〇世紀初頭、中国古画の国際市場における E・P・スツラヘルネクの二つのコレクション」東京文化財研究所編『うごくモノ：「美術品」の価値形成とは何か』平凡社、二〇〇四年、一八五―二一四頁。

- (5) 呉衡之によるスツラヘルネク「弁言」の訳文は簡潔かつ古雅な文語体で書かれている。ここではその内容を訳出することを優先し、漢文の書き下し文ではなく現代日本語に翻訳した。なお抽象的な内容のため、翻訳にあたってはスツラヘルネクによる英文原文も参照して適宜訳語あるいは英語を補い、呉衡之の用語そのままでは現代日本語で意味が異なる場合は他の語に言い換えた。角括弧内は訳者による補記である。

- (6) 中国近代の翻訳家、嚴復（一八五三―一九二一）が主張した翻訳の三原則。原文に忠実に（信）、わかりやすく（達）、美しく適切な言葉で（雅）訳すことを理想とした。この観点から見れば、呉衡之の訳文はこの三原則に忠実であり、特にリズム良く簡潔な文語文での表現能力には高い文学的素養が感じられる。それが現代日本

語への再翻訳によって冗長な表現に変じてしまった(「雅」は達成できなかった)のは日本語翻訳者の能力の問題である。

(7) ターザンシリーズは日本でも早川書房と創元社から翻訳出版されているが、本稿では以下の邦題の訳文として早川書房版を採用した(但し註74に関しては中国語からの直訳である)。なお早川書房版での作家名の表記はバロウズである。

(8) ここで挙げた各回の邦訳は、高橋豊訳『ターザンと黄金の獅子』(ハヤカワSF文庫特別版、早川書房、一九七三年)による。なお、呉衡之の訳による中国語のタイトルは敢えて原文のまま掲出した。

(9) 易経では「旅于處 得其資斧 我心不快」(火山旅、四爻)と続く。易学におけるこの卦象の一般的な解釈は、本文で示した解釈とは異なるようである。ここでは文脈に従い、文意に沿うように読んだことを断っておく。

(10) 本論文は、多方面にわたる呉衡之の活動を総合的に捉えた基礎研究である。これに対し、筆者は前掲註16の論文において、特に美術方面についての議論を展開している。黄賓虹と呉衡之の関係を中心に、世界芸術という概念がいかに中国絵画の市場形成に寄与したかについて掘り下げたものである。興味のある向きは参考にされた。

【挿図出典】

挿図1 郭建鵬、陳穎編著『南社社友録』上海大学出版社、二〇一七年、二二三七頁

挿図2 『學術世界』上海學術世界編訳社、一九三六年第一卷第八期第九八頁

挿図3、6 筆者蔵

挿図4 トーリルド・ウルフ「コレクターファールウス、中国にて」、モノクロ写真、一九二二―三年、スウェーデン。ヨーテボリ大学図書館蔵

挿図5 『中華名画 スツラヘルネク所蔵作品影印本』、商務印書館、一九一四年。筆者蔵

挿図7 Hanley Farnsworth MacNair, ed. *The Incomparable Lady: Tributes and Other Memorabilia Pertaining to Florence Wheelock Ayscough MacNair*. Chicago: printed for the author by University of Chicago Press, 1946, before p.71

挿図8 杭州高氏カメラ博物館蔵

挿図9 浙江省博物館蔵

挿図10 個人蔵、李若晴提供画像

挿図11 アイスコフ編訳『中国古今名人画像録』、私家出版、一九一五年

挿図12、13 陳国権編訳『中国近世女界大画家吳杏芬画』一九一五年、上海。オハイオ

州立大学図書館蔵

挿図14、15 呉衡之編訳『中華名勝図説』(修訂版)、私家出版、一九二六年

挿図16 『第一回中国年鑑』、商務印書館、一九二四年。香港中文大学図書館蔵

挿図17 バロウズ著・呉衡之訳『宝窟生還記 (Tarzan and the Golden Lion)』重版本、奥付なし、香港中文大学図書館蔵。初版本は商務印書館、一九二八年

挿図18 バロウズ著・胡憲生訳『野人記 (Tarzan of the Apes)』、『小説世界』一卷十二期、商務印書館、一九二三年三月二十三日

挿図19 ウィキペディア(パブリックドメイン)

挿図20 退翁呉衡之訳・胡懷琛校訂『最近名家小説訳叢』、商務印書館、一九三二年、筆者蔵

挿図21 アンダーソン著・退翁呉衡之訳『帰来』、商務印書館、一九三一年、香港大学図書館蔵

挿図22 フランス国家図書館蔵

挿図23 上海図書館上海科学技術情報研究所「全国報刊索引」(民国時期期刊全文数据库)

【付記】

本研究の調査は二〇〇一年に始まり、十八年間、筆者は王中秀(一九四〇―二〇一八)との交流で切磋琢磨し、得るところ多大であった。中国語と外国語の文献資料を調査校勘する中で驚きも喜びもあった。呉衡之の業績は複雑であり、その早年と晩年の状況については今もまだ詳細が不明であるが、呉が関わった範囲は広く、その影響は深くまで及んでおり、更に掘り下げる価値がある。研究の完全を期すため今後も内外の専門家各位に関連情報のご提供をお願いする次第である。資料収集にあたり、王曼隽、後藤亮子、陶喩之、曾四凱、易東華、張書彬、童宇、Peter Wichelag (林山石)、蔡涛、王霖、李若晴らの協力を得た。ここに記して感謝を表す。

(Zaixin Hong・米国「ユージェット・サウンド」大学 芸術・美術史学部教授)

(Zaixin Hong・東洋美術史研究者)

※原著 洪再新「務商、翻訳、中国芸術と世界文学——中西文化交流的推手呉衡之の考略(上)―(下)」、『美術学報』、広州美術学院、二〇一九年第五期(六〇―七三頁)、第六期(七六―八五頁)。本文はいくつかの修訂を含む改訂版である。

(本論文は令和二年度海外編集委員による推薦論文である)

付録・呉衡之重大事項年譜稿

一八七一年（清同治十）辛未 出生、本籍广东香山県。

一八九八年（清光緒二十四）戊戌 二十七歳 「惜余英文學塾」学生募集記事掲載開始、以後毎年春秋の学生募集時期は毎回募集広告を出した（『申報』二月十日）。

一八九九年（清光緒二十五）己亥 二十八歳 上海河南路天津路章東明酒店の上階で英語補習クラスを開講、呉培初がその学生となる（『旧上海の外商と買弁』、上海人民出版社、一九八七年、一〇九頁）。

一九〇二年（清光緒二十八年）壬寅 三十一歳 王雲五が同校で学ぶ。学校住所はやはり天津路（『岫廬八十自述』台北、商務印書館、一九六七年、二〇一―二一頁）。

一九〇六年（清光緒三十二年）丙午 三十五歳 秋、惜余英文學塾、北京路清遠里に移転。

一九〇九年（清宣統元）己酉 三十八歳 上海で開業したドイツ人F・フォルベルクとF・フォークツツの法律事務所の通訳を務める（商務印書館編訳所編『上海指南』、商務印書館、一九〇九年、一九一四年）。

一九一二年（民国元）壬子 四十一歳 「惜余英文學塾」を譲渡。

同校、「漢英商務学校」に改名。『神州日報』学生募集広告。

二月四日 『時報』「漢英商務学校授業開始」広告。

三月十四日 『時報』「務商中学」広告。

七月七日 『時報』「上海務商中学（旧名漢英商務学校）学生募集」広告。

八月八日 『時報』「務商中学学生募集」広告。

八月二十八日 『神州日報』「務商中学附属高等小学学生募集」広告。

十二月二十八日 『時報』「務商中学学生募集」広告。

一九一三年（民国二）癸丑 四十二歳

一月四日 『時報』「務商中学新年休暇休業式」。

十二月二十日 黄浦灘上海博物院で中国画コレクション展覧会が開催され広東の呉衡之が各

洋紳士収蔵の中国名画の展覧会）。

十二月二十九、三十一日 『神州日報』が広東呉衡之の訳によるスツラヘルネク『中国名画コレクション序文』を連載。

一九一四年（民国三）甲寅 四十三歳

四月 スツラヘルネク『中華名画』自序に「呉衡之が単独で翻訳を担当し特に尽力した」と記す。

五月三十日 務商中学第一回運動会を開催、来賓二千人超。薩鎮氷（鼎銘）、王寵惠、李登輝ら招待を受け到着（六月一日『時報』「務商中学第一回運動会記録」）。

六月四日 務商中学校長呉衡之、薩鼎銘より資金借入（『時報』一九一四年六月五日「務商中学による薩督弁の壮行会盛大に」）。

七月 中英両語『中華名画』スツラヘルネク所蔵作品印影』上海商務印書館より出版。

商務、翻訳、中国美術と世界文学

七月二日より一週間連続で『神州日報』『申報』『時報』に「二十世紀の新発明…中英両語完備『中華名画集』現る」に「中華呉衡之君、黄樸存君校訂」なる広告を掲載。

七月九日 『神州日報』に汪允宗の署名「圓照」で掲載された社説「中国美術の西洋への輸出」に「黄樸存、呉衡之の二名が資金援助」の記述。

八月二十二日 『時報』「務商中学、新入生募集」の広告。

九月二十二日 『神州日報』「務商中学新入生採用案」広告、「務商中学編入生募集」広告。

八月二日 上海務商中学秋期始業式（『時報』九月三日、『神州日報』九月五日「務商中学秋期始業式」）。

十一月十一日 『時報』「精武体操会卒業式」。

十一月十三日 『時報』十一月十四日務商中学第二回運動会の予告。

十一月二十日 『時報』「運動会は完全なり」の報道記事。

十一月二十八日 務商中学演説（『神州日報』十一月二十九日「務商中学における昨日の演説」）。

十二月十日 『時報』「高級生殖辺銀行を見学」、「神州日報」「務商中学、銀行を見学」。

一九一五年（民国四）乙卯 四十四歳

一月二十一日 『時報』「務商中学学生募集」。

二月十八日 『時報』「務商中学夜間部学生募集」。

二月二十一日 『時報』「務商中学教員募集」。

四月二日 『時報』「務商中学、王文典理事を歓迎」。

四月二十六日 『時報』「務商中学クラブ成立記事」。

六月二十日 『時報』「務商中学学生募集」。

七月四日 『時報』「務商中学成績」。

七月十三日 『時報』「務商中学第一回成績懇親会記事」。

七月十四日 『時報』「務商中学夏期休業式」。

七月二十二日 『時報』「務商中学銀行予科、学生募集」広告。

十一月 呉衡之、年齢を理由に務商中学校長職を辞す（十一月二十八日『時報』「廣告」）。

一九一六年（民国五）丙辰 四十五歳

二月八日 『時報』「通告」黄戴、務商中学を引き継ぐ。

五月三日 『時報』時評「務商中学、継続の資金なし」（『戈』公振）。

北浙江路の南洋商業公学の校長に就任。

五月二十八日 アメリカの児童教育者バセディ夫人を招待しその演説を翻訳、モンテッソーリ教育法を広める（同年五月二十九日『申報』「バセディ夫人講演盛況記」。また『香艷雜誌』同年六月第十二期の「女界新聞」バセディ夫人の講演の項を参照）。

六月十日 『時報』「工商会での絵画展示盛況」。

六月十七日 『時報』「商務通信教育学校は十七日、工商研究会を機に校友懇親会を開催、来賓の呉衡之が演説をした」。

七月十七日 『時報』「工商研究会南洋商業公学開学記事。呉衡之は病により出席せず」。

一九一七年（民国六）丁巳 四十六歳

潘飛声の六十歳誕生日を祝う対聯を撰文。

一九一九年（民国八）己未 四十八歳

南洋商業公学営業停止（『申報』一九三二年一月十八日「教育部、未認可私立学校の卒業生資格を否認」）。

十月十日 『時報』「美術週刊」黄賓虹が「古画出洋」で再び『中華名画』スツラヘルネク蔵品影本に触れる。また中国人である呉衡之が翻訳にあたり、沈洽生、郁載生の二名が印刷を担当した」。

十一月 許默齋（一八七三―一九二五）、滬北二悲室寓廬にて呉衡之編訳漢英両語『中華名勝図説』に序を寄せる。

十二月 吳衡之、『中華名勝図説』に自序を書く（英文訳）。

同月 黄賓虹、『中華名勝図説』に題字を書く。

同年、アメリカの在上海教会モーガン牧師『中華名勝図説』に序文を書く。

『中華名勝図説』(The eighteen famous scenery of China, Hsing-fen Wu: H.C. Wolfe) 初版、コロ版印刷、歙邑吳淑娟「杏芬」(一八五三—一九三〇)が山水名勝を十八幅作画、香山吳衡之訳述。

一九二二年(民国十) 辛酉 五十歳

二月一日 南社に加入。紹介者蔡哲夫、謝英伯、高劍父、黄樓存。加入書第一〇九五号。

一九二三年(民国十二) 壬戌 五十一歳

一月三日 商務印書館編訳所に加入、紹介者王雲五、仲春、吳佩孚、『中華名勝図説』増訂版に序を寄せる。

一九二四年(民国十三) 甲子 五十三歳

三月十四日 『時報』 吳衡之が十六日(日曜)午後二時に自宅退蔵室で古画展覧会を行うとの予告記事。

三月十六日 『申報』「古画展覧会本日開催」の記事。

三月十九日 『申報』「古画展覧会を參觀して」の記事。

三月 黄賓虹、吳衡之の依頼により高劍父へ、吳衡之の広州での不動産投資に関する仲裁を求め手紙を送る。

三月二十六日 高劍父、黄賓虹へ返信。仲裁を求められた吳衡之の広州の不動産投資に関して役に立っていない事情を説明する。

四月六日 『時報』商務印書館『第一回中国年鑑』主編：阮湘、編集：李希賢、吳秉鈞、余祥森、何松齡、范寿康、唐敬果、徐寿齡、陳掖神、章十天。

胡懷琛「陳默齋、吳衡之の招飲にて賦を贈る」陳默齋、吳衡之に再び示す(「胡懷琛詩歌叢稿」一九二六年)。

一九二五年(民国十四) 乙丑 五十四歳

三月 雷声布、凱密弁護士事務所の求人に応じ事務員となる(『申報』三月二十九日「雷声布、凱密英弁護士事務所告示」)。

三月三十一日 『申報』同一広告。

一九二六年(民国十五) 丙寅 五十五歳

四月二十二日 在上海アメリカ領事館職員チャピン、『中華名勝図説』増訂版に序文を書く。

四月二十三日 在上海アメリカ領事カニングハム、『中華名勝図説』増訂版に序文を書く。

中英両語『中華名勝図説』増訂版 (The Eighteen famous Chinese landscape painted by Madame Wu Hsing-fen, the most distinguished painteress of modern China. This catalogue contains eighteen colorized reproductions, with descriptions in Chinese and English by H.C. Wolfe. Second Edition. Revised) 出版。

一九二七年(民国十六) 丁卯 五十六歳

一月 招聘を受け、鄭毓秀、魏道明法律事務所支所の仕事に協力(『申報』一月二十六日「鄭毓秀、魏道明法律事務所告示」)。

一九二八年(民国十七) 戊辰 五十七歳

一月一日 『総合英漢大辞典』(A Comprehensive English-Chinese Dictionary) 編集に参与。主編：黄土復、江鉄、校正：王雲五、何松齡、陳承澤、編集者：文元模、李希賢、吳衡之、周昌寿、林癸、胡嘉詒、程選公、鄭貞文、謝六逸、戴鴻儒、羅鼎、顧寿白。初版は二冊の分冊、それぞれ正編、補編に分かれる(『申報』第七頁)。

『宝窟生還記』(Tarzan and the Golden Lion) 米国パロース (Edgar Rice Burroughs, 1875-1950) 著、吳衡之訳、商務印書館(上海)、小説世界ターザンシリーズ(叢刊野人記)第九編三冊、七

角(『申報』六月十六日第七頁商務印書館広告)。

一九三〇年(民国十九) 庚午 五十九歳

春四月 吳衡之編『旅行月刊』雑誌、黄賓虹に旅行記の寄稿を求め、黄の「黄山前海游记」に編者の言葉を添えて第五卷第四号に掲載。

同号に「中国人と西洋人の旅行概念の相違」(退翁)を発表。

同号にも南洋商業公学の学生だった谷德泉(徳全)の「海虞游记」に編者の言葉を添えて掲載。

七月 『桂游日記(未完)』(黄賓虹)、『旅行月刊』第五卷第五号に掲載。

同号に「欧米著名探検家列伝(退翁訳)と自序」を掲載。

同号に付録として吳杏芬夫人題・画の黄海松風図と古律詩を掲載。

同号に潘蘭史「虞山謁言子墓、下虞山至高湖回望三峰」詩二首を掲載。

七月二日 『申報』第一頁、商務印書館の広告、『宝窟生還記』吳衡之訳三冊七角の記載。

一九三二年(民国二十) 辛未 六十歳

一月 江蘇教育庁に南洋商業公学一九一六年の商科学生十二名、一九一七年の商科学生二十八名銀行科学生二十八名の卒業資格の追加認定を請求し、妥当な解決案を求める。(『申報』一月十八日「教育部、未認可私立学校の卒業生資格を否認」)。

四月 『帰来』アンダーセン著、退翁吳衡之訳、商務印書館(上海)、小説世界叢刊。

五月 『最近名家小説訳叢』上下冊、退翁吳衡之訳、胡寄塵懷琛校訂、商務印書館(上海)、小説世界叢刊。

十月十八日 『申報』第一頁、商務印書館の広告を掲載、『宝窟生還記』定価五角五分、吳衡之訳、上下二冊の記載。

一九三三年(民国二十一) 癸酉 六十二歳

四月十二日 『申報』「遼」(臺)「吉」(林)「黒」(竜江)「熱」(河)義勇軍後援会、寄付に感謝「吳衡之は十元を寄付」。

一九三四年(民国二十三) 甲戌 六十三歳

春 この頃吳衡之は既に逝去か。要検討。

一九三五年(民国二十四) 乙亥

二月二十三日 『申報』第四頁に商務印書館の広告、『宝窟生還記』吳衡之訳(第一版)一冊五角五分の記載。

六月七日 『申報』第一頁に商務印書館の広告、『宝窟生還記』吳衡之訳(第二版)一冊五角五分の記載。

一九三六年(民国二十五) 丙子

黄賓虹「吳衡之訳某女史画譜序」が『学術世界』一九三六年第一卷第八期、第九八頁に再掲載される。

十一月二十八日 『申報』第二頁に商務印書館の広告、『宝窟生還記』E.R. Burroughs 著、吳衡之訳(第五版)一冊五角五分の記載。

一九三七年(民国二十六) 丁丑

『総合英漢大辞典』(A Comprehensive English-Chinese Dictionary) 一冊に合本。

一九四八年(民国三十七) 戊子

『総合英漢大辞典』(A Comprehensive English-Chinese Dictionary) 合本第八版刊行。